

『椿説 おくのほそ道』

御笠ノ忠次

《登場人物》

松尾芭蕉

河合曾良

吉川惟足

馬鹿田馬鹿吉

伊達綱宗

伊達綱村

柳原戸兵衛

世瀬蔵人

まきを

貞

藤堂良忠

高尾

ちとり

伊代

半六

島田重三郎

ふさ

黒子軍団

ドーンとド派手な音に合わせて前説黒子軍団登場。

台詞の間に和太鼓やら柝やらで間の手が入る。

黒子A「本日は椿説おくのほそ道に御来場頂きまして誠に……」
全員「ありがとうございます」

黒子B「この物語は松尾芭蕉の奥の細道を題材にしております」

黒子C「松尾芭蕉と言えば世界的に有名な俳人だよね」

黒子D「廃人？ 人間のクズ？」

黒子C「その廃人じゃないね、俳句を作る人で俳人、俳諧師とも言うね。松尾芭蕉は江戸時代に活躍した俳諧師なんだ」

黒子D「えー、じゃあ今回は歴史の話し〜？ 難しそ〜」

黒子A「確かに確かに。歴史を題材にした物語は時代背景がわかっていないと
楽しめない場合がございます」

黒子B「そんなわけでもずは手始めに、我々黒子軍団がこの物語の背景をと
て

・も・わかりやすく解説致したいと思えます」

黒子C「よろしく」

全員「お願い致します」

拍手なんぞを頂きたいものですな。

黒子A「時は元禄二年、西暦に直しますと1689年、徳川幕府は五代将軍綱
吉の時代！」

と言い、綱吉に見立てた何かを取り出す。これは人形でもこけしでも初音ミ
クのフィギュアでも、とにかく形状が面白ければなんでも良い。

黒子D「え？ え？ え？ それは何？」

黒子A「徳川綱吉」

黒子D 「〇〇じゃん」

黒子A 「そこはお前、そういう体だっつの」

黒子B 「空気読めよ」

黒子C 「馬鹿」

黒子D 「ああ、そういうことね、OK」

黒子A 「少しイラっとしつつも）徳川綱吉と言えば、悪名高い生類憐みの令を制定した將軍」

黒子D 「え？ え？ え？ ごめん、生類憐みの令？ なにそれ？」

黒子B 「犬とか猫とかを殺すなって言う法律だよ」

黒子D 「え？ 当たり前のことじゃん、なんで悪名高いのさ」

黒子C 「燕を殺して死刑になったりする極端な法律だからだよ」

黒子D 「でも動物愛護の観点から見ればさ…」

黒子A 「おい、先に進ませろよ」

黒子B 「ここで引かかってたらどこにも行けねえぞ」

黒子C 「最悪前説で終わんぞこの芝居」

黒子D 「なるほどね、OK、さあ先に行こうか」

黒子A 「なんかイラっとしつつも）そんな五代將軍綱吉の時代、松尾芭蕉は伊賀忍者であつた過去を隠しながら江戸で俳諧師として暮らしていた」

松尾芭蕉に見立てた何かを出す。

黒子D 「ちよいちよいちよいちよい…それは無いって」

黒子A 「だからこれは…」

黒子D 「松尾芭蕉って俳人なんでしょ？ 忍者て」

黒子B 「あ、そっちね。松尾芭蕉は伊賀の生まれで、実は忍者だったのではないかっていうのは割と有名な説なんだよ」

黒子D 「そうなの？」

黒子C 「そうだよ」

黒子B 「俳句の天才でしかも忍者でって、すげえだろ？」

黒子D 「（ニヤニヤと）…それはどうかなあ」

黒子B 「なんだよ急に」

黒子D 「俳句は一流だったかもしれないけどさあ（滔々と）あのさ、忍者の矛盾って知ってる？ 歴史上有名な忍者の抱えている矛盾。例えば服部半蔵とか猿飛佐助とか。あのね、有名な忍者って矛盾なんだよ。だって忍者は忍んでなんぼだろ？ 世の中から姿を隠してなんぼだろ？ それなのに歴史上に名前を残しちゃうなんてさあ、そんなの忍者としては無能だったと言わざるを得ないよね『お前、忍べよ！ 隠れろよ！』って。芭蕉も忍者説があるのにこんなにも有名なら、まあ大した忍者じゃなかったってことだよね」

間。

黒子C 「テメエ！ これから始まる物語の主人公デイスってんじゃねえよ！」

黒子D 「それもそうだね、続けて続けて」

黒子B 「ノリ軽っ！」

黒子C 「駄目だ、コイツのことは無視しよう」

黒子A 「だな。えー、この時代の日本には、江戸に徳川幕府、京都には朝廷と、二つの権力機構が存在していました…これ天皇、怒らないでね」

天皇に見立てた何かを取り出す。

黒子B 「天皇を中心とした朝廷は倒幕を企て、権力の奪還を虎視眈々と…」

黒子D 「ちよつとちよつと、幾らなんでも俺のこと舐め過ぎでしょう？」

黒子C 「今お前の話しなんてしてねーよ！」

黒子D 「朝廷を中心とした倒幕運動が起きるのはもつと後、芭蕉の時代から180年も先の幕末の時期だぜ？ この段階ではまだまだ倒幕なんて…」

黒子A 「あのなあ、幕末に徳川幕府を倒した長州藩や薩摩藩は関ヶ原の戦いの負け組で、260年以上も耐え忍んで復讐を果たしたんだよ！」

黒子B 「芭蕉が活躍したのは関ヶ原の戦いから百年も経ってないの！」

黒子C 「その間、水面下で幕府を倒す準備をすすめてたんだよ！」

黒子D 「でも260年で、準備に時間かかり過ぎじゃね？」

黒子A 「それは…」

黒子B 「まあ…」

黒子C「そうだけど…」

黒子D「馬鹿だなあ、それだけ徳川幕府の権力基盤が盤石だったってことじゃないか」

黒子A「オメーどっちの立場でモノ語ってんだよ！」

黒子B「意見があっち行ったりこっち行ったり…」

黒子C「誰の味方なんだよテメー！」

不穏な空気。

黒子D「…誰の味方かだつて？ ふふふ、それを明かさないのが忍じゃないのかね？」

黒子A「むむ？」

黒子D「敵か味方か正体不明…それこそが真の忍！」

派手な音と共に黒子Dが衣裳を脱ぎ捨てる。
中に着込んでいたのは忍び装束。

黒子B「貴様！」

黒子C「何奴！」

戸兵衛「…黒子D改め…仙台藩…黒脛巾組…柳原戸兵衛」

黒子A「黒脛巾組だあ？ なんだそれ！」

黒子B「ええい！ やつちまえ！」

黒子ABCが刀を抜き、奇声を上げて襲いかかる。

三人を瞬殺する戸兵衛。

戸兵衛「…忍の名を聞いた者には、死あるのみ…」

黒子A「…まだ…前説の途中だったのに」

黒子B「携帯電話の電源は…オ…フ…」

黒子達が倒れる。

戸兵衛「…というわけで、この物語は朝廷に味方する仙台藩の忍である我々黒脛巾組や、徳川幕府に味方する伊賀忍者、そしてそして元伊賀忍者でありながら俳諧師として活躍する松尾芭蕉やその弟子の河合曾良までを巻き込んだ熱血忍者バトル活劇なのであります！ それでは椿説奥のほそみち、始まり始まり〜」

拍子木が鳴って開演。

【1】

三味線の音が鳴り響いている。

ここは吉原の遊郭、三浦屋の一室。

太夫の高尾が歌っている。

高尾の傍には新造のちとり。

お大尽風の男が酒を飲みながら聴いている。

男の正体は身分を隠した伊達綱宗。

部屋にいる男達は商人風だが実は伊達家の侍。

綱宗が高尾の手首をグイと掴む。

高尾「あれ」

ちとり「(驚き)は！」

綱宗は高尾を抱き寄せる。

ちとり「…あ、姉さん」

高尾「…大丈夫よ、ちとり」

ちとり「で、でも…」

綱宗「ふっふっふっ」

高尾「旦那様、野暮でありんすよ」

綱宗「高尾よ…良いではないか」

高尾「嫌でありんす」

高尾は綱宗から離れる。

綱宗「金が欲しいのか？（懐から取り出した小判をばらまき）ほれ、こんなもの
幾らでもくれてやる」

高尾「…」

綱宗「…拾え…拾ってそして…」

高尾「？」

綱宗「やらせろお！」

高尾に襲いかかる綱宗。

悲鳴をあげて走り回るちとり。

ちとり「ぎいいいいいやあああああ！だ、だれかあああああ！」

ちとりは結構な勢いで叫び喚く。

綱宗「ちい！うるさい！黙らせろ！」

家来達「は！」

家来達は騒ぐちとりをとり囲む。

手籠めにするで見せかけて何故かちとりを胴上げする家来達。

家来達「ほーれ、えっほ！えっほ！」

ちとり「何これ？高い！怖い！」

なんだかよくわからないが大人しくなるちとり。

綱宗「ふふ、さてと、では改めて…や…らせて…」（イントネーションが変）

不格好に高尾にしがみつく綱宗。

高尾「やめろ！離れろ！このドスケベ！」

綱宗「や・ら・せ・て・く・れえ！」

全力で抵抗する高尾、案外強い。

と、隣の部屋から

芭蕉「(OFF) 待ちやがれ！」

襖が颯と開いて登場とか、とにかくカッコ良く現れる芭蕉と曾良。

芭蕉は立って背中を向けていて曾良は低く屈めている。

芭蕉は持っていた杯を飲み干し

芭蕉「この吉原で野暮と言われて引き下がらねえとは…何処の田舎もんだ？」

芭蕉が振り返る。

家来達は顔を見合わせ

家来A「誰が田舎もんだっちゃ！」

家来B「あつぺとつぺなことばかりかだつてんな！」

家来C「おだつなよ！」

芭蕉「めちやめちや田舎もんじゃねーか！ いや…何処の田舎侍と言うべきだつたかな」

動揺する家来達。

曾良「…この訛り、仙台訛りですな」

芭蕉「ほう…ということはデメエら伊達の家中のもんだなあ？」

家来A「あんやほに！」

綱宗が前に出て

綱宗「貴様、何者だ！」

芭蕉「あ、普通に喋れる奴が出て来た」

綱宗「何者だと聞いている！」

芭蕉「人様に名前を聞くときはまずは自分からってのが相場だろうが！ま、名乗れるはずもねえだろうがな」

綱宗「ええい！ やってしまえ！」

隠していた刀を取り出す家来達。

芭蕉「揚屋に刀を持ち込むたあ、重ね重ね野暮だねえ…わかってんのかい？ 此処での喧嘩は死に損だぜ」

刀を抜く家来達。

芭蕉「…あーそうかい、じゃあ…」

芭蕉は杖を取り出し

芭蕉「曾良、手加減してやるんだぜ」

曾良「はい」

扇子を構える曾良。

家来達「しつぱたくど！」

一斉に襲いかかる仙台藩士達。

曾良の扇子が華麗に全ての刀を弾く。

綱宗「…鉄扇」

動揺する仙台藩士達。

芭蕉「相変わらず惚れ惚れする扇さばきだねえ」

曾良「…感心している場合なのでしようか？」

芭蕉「はっはっは！ それもそうか、どれ…」

杖を地面に突き立てるように構える。

これから戦おうという構えには見えない。

芭蕉「どっからでもかかってきやがれ」

綱宗「…おのれ舐めくさりおって…構わん！ 斬れ！ 斬って捨てよ！」
家来達「この、ほでますが！」

襲いかかる仙台藩士達。

芭蕉は仕込み杖を抜き放ち華麗に立ち回る。

敵を駆逐する芭蕉と曾良。

倒れる家来達。

家来A「がおる〜」

家来B「ゆるぐね〜」

家来C「らずもね〜」

綱宗「…」

芭蕉「あとはアンタだけだぜ」

綱宗「…くっ、覚えておれ」

綱宗は去って行く。

家来達は「殿！」などと言いながら追って去る。

芭蕉は去って行く姿を見つめ

芭蕉「…仙台藩か…仙台と言えば宮城野…花は萩…」

芭蕉は夜空を見上げ

芭蕉「おお、今宵も月が美しい」

高尾「…あの」

芭蕉「ん？」

高尾「ありがとうございます…おかげ様で助かりました」

芭蕉「ん？ん？ん？」

高尾の顔をマジマジと見る芭蕉。

芭蕉「…仙台藩…太夫に廓…んんんん！」

なんだかゴゴゴゴゴゴゴゴという効果音。

曾良「…もしや」

芭蕉「…きた…きたきたきたきたきたきたあ！曾良！矢立を！」

曾良「はい！」

曾良が懐から颯爽と矢立を取り出す。

バーンと派手な音と照明。

声もマイクで拾ってエフェクトかけちゃって。

芭蕉「一家に遊女もねたり萩と月」

ドカーン。

曾良「…お見事」

世界は元に戻る。

芭蕉「行くぞ曾良！」

曾良「は！」

「出て行こうとする芭蕉。」

高尾「あの！もし！お名前を！」

芭蕉は立ち止まって振り返り

芭蕉「…芭蕉…松尾芭蕉だ！」

去って行く芭蕉。

曾良は高尾に一礼して去って行く。

高尾「…あのお方が…松尾…芭蕉様」

場面が切り替わる。

伊達家上屋敷。

家臣数名が吹っ飛んで来る。

家臣A「綱宗様！お止め下され！お止め下され！」

現れた綱宗が家臣達をブンブン投げ回す。

綱宗「ええい！黙れ黙れ！腰抜けどもが！」

伊達綱村が現れる。

ドドン。

「仙台藩 藩主 伊達綱村」

綱村「…父上」

綱宗「おお、綱村か」

綱村「いかがなされたのです？」

綱宗「…いや」

綱村「とぼけないで下さい、吉原での一件でございました」

綱宗「…ん、むむ、既にお前の耳にも入っておるのか」

綱村「…困りますなあ、あのような騒ぎを起こされては…ただでさえ父上は幕

府に目をつけられているというのに」

綱宗「…ん、すまぬ」

綱村「…それで？どうするおつもりです？」

綱宗「どうするもこうするも…」

綱村はやや飽きた目で父を見つめ

綱村「…戸兵衛」

戸兵衛「(OFF)は！」

戸兵衛があらぬ場所から現れる。

綱村「少し調べさせました…まあ、わざわざ忍を使うまでも無かったのですが」

綱宗「ふむ、して？ あやつ等は何者じゃ？」

戸兵衛「…天下に名高き俳聖、松尾芭蕉と、その弟子の河合曾良かと」

綱宗「なんと！ あやつが松尾芭蕉！」

綱村「父上、相手が悪うございましたな。この江戸で評判の高い松尾芭蕉を相

手に喧嘩など…ちと分が悪うございます」

綱宗「う、ううむ」

綱村は父の様子を見て

綱村「…ま、とは言え、天下の伊達家がこのままおめおめと引き下がるわけに

もまいますまい」

綱宗「(笑みを浮かべ)綱村…しかし、どうするのじゃ？」

綱村「戸兵衛、お前の口から申せ」

戸兵衛「は！ 松尾芭蕉は今こそ俳諧師として高名ではございますが、その素

性は伊賀の甚四郎と呼ばれた忍」

綱宗「何？ それは誠か！」

戸兵衛「間違いございませぬ」

綱村「戸兵衛はかつて忍働きの道中で伊賀の甚四郎と渡り合ったことがあるの

だとか」

戸兵衛「…は」

綱村「芭蕉は忍であったことを隠して生きております…あるいはそこを突けば

…」

綱宗「なるほど。忍同士の喧嘩として奴を葬る…か」

綱村「はい」

綱宗「しかし、伊賀の忍ということは幕府お抱えの忍、徳川との戦になりはせ

ぬか？」

戸兵衛「…甚四郎は抜け忍でございます。その心配はございませぬ」

綱宗「…そうか…そうか…ふふふ…戸兵衛とやら…良きに計らえ」

戸兵衛「は！」

綱宗は笑いながらいなくなる。

今度は嬉しそうに家臣をブンブン投げ回す。

綱村「…愚かな父を持つと苦労する」

戸兵衛「…」

綱村「…戸兵衛よ、芭蕉との喧嘩、貴様は勝ったのか？」

戸兵衛「…それは」

綱村「…ふん。この平和な御時世、さほど役にも立たん忍を抱えているのはなんのためか…少しは役に立てよ」

戸兵衛「…は」

綱村「…見事芭蕉を討ち取った暁には…そうさな、黒脛巾組の罪を許してやつても良いぞ」

戸兵衛「…は！」

戸兵衛はいなくなる。

綱村「…ふん、忍というのは…やはり愚かよの」

綱村はいなくなる。

吉川惟足の屋敷。

惟足が現れる。

ドドンという音。

「吉川神道創始者 幕府神道方 吉川惟足」

惟足「はははは！ 吉原ではだいぶ暴れたらしいではないか、噂になっているぞ」

曾良が現れる。

曾良「…それは…芭蕉殿が」

惟足「ふん、松尾芭蕉…伊賀の忍か」

曾良「…元、忍でございます…今は忍であった過去は捨て、風流の世界に生きておられます」

惟足「知っておる、五七五を並べたて、大層評判をとっておるらしいの」

曾良「…」

惟足「…忍風情が生意気なことよのう」

曾良「…惟足殿、わざわざそのようなことを仰りたいが為に私を呼んだのですか？」

惟足「…師匠に向かって、冷たいのう」

曾良「かつての師でございます。今の私はあなたの弟子でもなんでもない」

惟足「(笑) 相変わらざるの正直者じゃ、河合曾良！ 貴様のそういうところは嫌いではない。どうじゃ？ また私の下で働かぬか？」

曾良「お断りいたします」

惟足「…ふむ、そう言うと思ったわい」

曾良「お話はそれだけですか？」

惟足「まあ待て、本題はこれからじゃ」

曾良「？」

惟足「…貴様も知つての通り、我が吉川神道は幕府の中枢に潜り込むことに成功した。寺社奉行神道方に任命され、將軍綱吉を始め幕府重鎮の信頼も厚い…」

曾良「…」

惟足「…ふふ、だが、それはあくまでかりそめの姿。幕府を内側から食い破り、天皇を中心とした世を作るのが真の目的。すなわち、倒幕こそが我が本懐。…ふふ、愚かよのう幕府の連中も。自らの腹に毒を抱えていることも知らずに…」

曾良「…獅子身中の虫」

惟足「うん？」

曾良「…私は…あなたのそういうところが嫌いなのです」

惟足「…ほう」

曾良「…目的の為であれば神をも欺く」

惟足「手段を選んでいては目的は果たせない」

曾良「…私は、そうは思いません」

惟足「…」

曾良「目的のために、ひとつひとつ考え、ひとつひとつ手段を選んでいき、決して近道はしない…今の私の師は、そういう人です」

惟足「…ふん」

曾良「…失礼いたします」

帰りかける曾良。

惟足「…一つ、忠告しておいてやろう」

曾良「？」

惟足「…吉原での喧嘩、その相手が誰であったのか、貴様気付いておるのか？」

曾良「…伊達家御家中の者かと」

惟足「…伊達綱宗」

曾良「…まさか！ 仙台藩…藩主の…」

惟足「そうじゃ」

動揺する曾良。

惟足「…綱宗公は亡くなられた後西天皇とは従兄弟同士というお家柄。御子息の綱村様は私も親しくさせて頂いているお方で共に幕府を倒そうと誓いおうた仲でもある」

曾良「…」

惟足「(不敵な笑みを浮かべ)…綱村様からの伝言じゃ…このままで済むと思うなよ…だそうじゃ…ふふ、伊達家を敵に回すとは…愚かよのう」

曾良「…」

惟足は曾良の顎をしゃくり

惟足「…どうじゃ？ 私が頼めば綱村様も許してくれると思うのだが」

曾良は惟足から離れ

曾良「…虫め」

惟足「ふふ、虫も侮れば命を落とすぞ」

曾良「(笑みを浮かべ)…鳴かぬ虫に興味はございませぬ」

曾良はいなくなる。

惟足は不敵な笑みを浮かべ

惟足「…さて…遊ぶかの」

惟足もいなくなる。

賭場。

雷鳴。

「丁だ――――！！」

「半だ――！！」

と、叫びながら、つぼふりや博徒達が物凄い勢いでやって来て一瞬で賭場を作り上げる。

ここは無駄に体を酷使しなければならない賭場。

張る時は「丁！」「半」と叫びながら前宙しなければ張れないような……とても賑やかな賭場、だがその動きに特に意味は無い。

つぼふり「サブロクの半」

勝った側は喜びの声をあげ、負けた側は怒声をあげる。
ワイワイガヤガヤとしている。

博徒の中に芭蕉も混じっている。

芭蕉の隣には馬鹿田馬鹿吉、頭にキノコが生えている。

馬鹿吉「兄貴！ 兄貴！ 芭蕉の兄貴！」

芭蕉「うるせーな馬鹿吉、今集中してんだよ」

つぼふり「ハイ、つぼをかぶります」

馬鹿吉「聞きましたぞ、吉原で侍相手に喧嘩したんでがしよ？」

芭蕉「相変わらずの早耳だなオメーは」

つぼふり「はい、丁方ないか？ 丁方ないか？」

「丁だ——————————————————————！」

つぼふり「はい、半方ないか？ 半方ないか？」

「半だ——————————————————————！」

と、博徒達が丁半に張る。

馬鹿吉「すげえなあ兄貴は。俺なんて侍相手に喧嘩なんておっかなくて出来やしねえ」

芭蕉「…別に…侍なんてそんな大したもんじゃねえよ」

馬鹿吉「そんなおっかねえ顔しねーでくださいよ、兄貴の侍嫌いは俺が一番よく知ってるんだから」

芭蕉「…」

雷が鳴る。

馬鹿吉「ひよーおっかねえ、近くに落ちたかなあ」

芭蕉「…」

馬鹿吉「…そういや、あの日もこんな天気でしたねえ、兄貴」

光が芭蕉だけを抜いていく。

芭蕉「…」

芭蕉は怒りの形相で叩きつけるようにコマを張る。

雷が落ちる。

雨が降っている。

場面はかつての伊賀国になっている。

無言で仕込み杖を抜く芭蕉。

芭蕉「…」

藤堂良忠が現れる。

良忠「…宗房」

芭蕉「…良忠様」

良忠「…追っ手はお前か」

芭蕉は仕込み杖を納め

芭蕉「…良忠様、お逃げ下され」

良忠「…わしを愚弄するのか？」

芭蕉「良忠様！」

良忠は抜刀し、芭蕉に斬りかかる。

良忠「抜け！宗房！」

芭蕉「出来ませぬ！」

良忠「痴れ者め！わしを討ち取れと命ぜられてきたのであろう！抜け！」

芭蕉「出来ませぬ！」

芭蕉は杖で攻撃を受けながら

芭蕉「…教えて下され！何故です…何故、このようなことに！」

良忠「…それは…わしが…侍だからだ！」

芭蕉「…そのような…承服出来ませぬ！」

良忠「…宗房、これがお前が憧れた侍というものだ」

芭蕉「！」

良忠は芭蕉から離れる。

芭蕉「…良忠様」

良忠「…侍とは不自由なものだ…つまらぬこととわかっていながら命を奪わねばならぬ…人の命も、己の命も」

芭蕉「…」

良忠「…もし…生まれ変わるのであれば…自由に生きてみたいものじゃな…」

自由に旅をし、自由に句を読む…なあ、そうは思わぬか」

芭蕉「…良忠様」

良忠「…わしに残されているのは…もはや、自由に死ぬことくらいか…」

芭蕉「良忠様？」

良忠「…お前と貞の祝言…この目で見たかった」

芭蕉「良忠様！」

良忠は腹に刀を突き立てる。

芭蕉「良忠様！」

崩れ落ちる良忠に駆け寄る芭蕉。

良忠は芭蕉を撥ねのける。

良忠「…介錯を」

芭蕉「良忠様！」

良忠「…すまぬのう…お前を巻き込むつもりは無かった…」

芭蕉「…」

良忠「…宗房…忍には戻るなよ…お前には俳諧の才がある…この先何かあれば…その道で身を立てよ…良いな？」

芭蕉「…」

良忠「良いな！」

雷の落ちる音。

芭蕉「…雲とへだつ友かや雁の生き別れ」

良忠は微笑み

良忠「…見事だ」

自らの腹を搔っ捌く良忠。

叫び声をあげながら良忠の首を落とす芭蕉。

暗転。

雨の中、芭蕉が立っている。

芭蕉の傍らには馬鹿吉。

貞がやって来る。

貞「…宗房様…兄上は…」

芭蕉「…」

馬鹿吉を見る貞。

何も答えられず目をそらす馬鹿吉。

芭蕉は跪き

芭蕉「お喜び下され貞様！ 不忠者の藤堂良忠めは、この松尾宗房が斬って捨て

ました！」

貞「…いや…いやああああ！」

貞がいなくなる。

馬鹿吉「…兄貴」

芭蕉「…変わらねーじゃねーか…忍も…侍も…」

納刀して、去る。

世瀬蔵人宅。

戸兵衛がやって来る。

戸兵衛「頼もう！」

反対側から世瀬蔵人。

「元黒脛巾組組頭 世瀬蔵人」

蔵人「…戸兵衛」

戸兵衛「…蔵人」

蔵人「…久しいの」

戸兵衛「…ああ」

蔵人「何しにまいった」

戸兵衛「力を借りたい」

蔵人「…」

戸兵衛「黒脛巾組再興の為に貴様の力が必要なのだ」

蔵人「…今更何を言う」

戸兵衛「綱村様は約束して下さった！ 此度の働き次第では再び召し抱えて下さると…」

蔵人「伊達家に仕える気は無い！」

戸兵衛「…」

蔵人「…忘れたのか？ 十年前のあの戦を…我らは武士の…伊達家の捨て石にされた！」

戸兵衛「…」

蔵人「…あの戦で…忍の時代は終わったんだ…小助も死んだ…俺はもう、二度と忍び働きをするつもりは無い」

戸兵衛「……………心得違いをするな蔵人！」

蔵人「…」

戸部絵「…忍は影ぞ…忍は草ぞ…陽が当たらずとも、踏みにじられようとも、

例え捨て石にされようとも主命を果たす…それが真の忍の姿であろう！」

蔵人「…」

戸兵衛「…蔵人よ…これは意地なのだ」

蔵人「意地…貴様こそ忍らしくないことを言う」

戸兵衛「…此度の狙いは松尾芭蕉の首」

蔵人「ふん、天下に名高き俳諧師の命を奪ってなんとする」

戸兵衛「…かつての名は…伊賀の甚四郎」

蔵人「！」

戸兵衛「…そうだ、我らの…蔵人、貴様にとっては義弟の敵」

蔵人「…松尾芭蕉が…伊賀の甚四郎…」

戸兵衛「…ああ」

蔵人「…話しを聞こう…入れ」

蔵人が去る。

戸兵衛も後を追う。

【6】

夜道を一人歩く曾良。

ふいに立ち止まる。

曾良「…何者ですか…出て来なさい」

覆面を被った忍が曾良を襲う。

攻撃を華麗に躲す曾良。

曾良と忍の戦い。

鉄扇の一撃を喰らわされ、覆面は引き下がる。

曾良は別の気配に気がつく。

曾良「…」

別の忍が襲って来る。

忍は軽快な身のこなしで戦いの序盤を圧倒する。

たまらず鉄扇で応戦する曾良。

しばらく戦った後、覆面を脱ぐ。

正体は伊賀忍者、伊代と半六。

半六は伊代の背後にひかえている。

伊代「ふふふ、久しぶりだね、曾良」

曾良「…伊代様：戯れはやめて頂きたい」

伊代「相変わらず堅い男だねえ」

曾良「伊代様こそ、相変わらずの乱暴ぶり」

半六が曾良を威圧するように一歩前が出る。

伊代「半六」

半六「…」

半六が引き下がる。

伊代「…曾良、甚四郎は元気にしてる？」

曾良「ええ、元氣過ぎて困るくらいに」

伊代「…そう、よろしく伝えといて」

曾良「直接会ってお伝えすれば良いのでは？」

伊代「立場、私が抜け忍と会うわけにはいかないでしょう」

曾良「確か、伊賀の掟では抜け忍は始末されるはず…芭蕉殿を生かしておいて

いるのも伊賀の方針ですか？」

半六「…貴様」

伊代「(手で制し) 大奥にもアイツの俳句を楽しみにしてる人は多いの。天下に

名高い松尾芭蕉を伊賀の都合だけで簡単に殺すことは出来ない」

曾良「時の流れとともに忍の掟も緩んで来ているのですね」

半六「いいかげんにしろ貴様あ！」

伊代「半六！ あんたは先に戻っていなさい」

半六「しかし！ この者は伊賀を愚弄し…」

伊代「いいから行きなさい」

半六「…」

半六は渋々といった様子でいなくなる。

伊代「ごめんね、曾良、悪い奴じゃないんだ」

曾良「ええ」

伊代「…あなたの言うこと、否定出来ないな」

曾良「？」

伊代「緩んで来ているの実際、伊賀だけじゃなく、忍の世界全体がね」

曾良「戦国の世が終わり、忍の活躍出来る場所が減ったから？」

伊代「…きっとそれが一番大きな理由なんだろうけど…徳川家を影で支えた

伊賀者も、今ではお城の警備が主な仕事だもん…」

曾良「…それで？何か御用がお有りで？」

伊代は改まった態度で

伊代「…伊達ともめたそうね」

曾良「…」

伊代「…まずいことになるかもしれない」

曾良「…先程、惟足様からも同じようなことを言われましたよ」

伊代「…吉川惟足…綱吉様を勤王に洗脳しようとしている厄介な男」

曾良「…將軍が勤王に傾き、幕府と朝廷が手を取り合えば、より良い世の中になるのでは？」

伊代「あちらに手を取り合うつもりがあればね…そんなたまじやないことは元弟子のアンタが一番良く知ってるでしょう？」

曾良「…あれは…虫です」

伊代「…まあ、將軍が勤王になったところで朝廷に政權を返上するようなことは、100年経ってもありえないでしょうけど」

曾良「大政を奉還するということですか？そんなこと200年経ったってありえないでしょう」

高らかに笑う二人。

別空間に馬鹿吉がいる。

馬鹿吉「いきし！(くしゃみ)…あれ？今から丁度178年後の幕末にそんな

なことが起きそうな気がする……ん？幕末ってなんだ？」

馬鹿吉がいなくなる。

伊代「そんなことより、伊達よ伊達、黒脛巾組に動きがあつたの。甚四郎が狙われるかもしれない」

曾良「黒脛巾組は十年前のあの戦で壊滅したはずでは？」

伊代「…残党をね…見かけたって、半六が…」

曾良「…黒脛巾組か」

伊代「…気をつけてね、連中は伊賀忍や甚四郎に強い恨みを抱いているから…甚四郎の傍にいるあなたも狙われるかもしれない…お互い当分の間は目立たないようにしましょう」

曾良「御忠告、ありがとうございます」

伊代は頷き、覆面を被り、物凄く目立つ去り方をする。

曾良「…伊代様、それが目立つと思うのですが」

曾良もいなくなる。

【ブリッジ】

犬（ふさ）が駆けて来る。

ふさを追ってマヌケな浪人風が走って来る。

重三郎 「ははははは、ふさよ、待て待て待て待て、よーしよーしよーし！」

ふさとじゃれる重三郎。

重三郎のテンションについていけないふさ。
たまらず逃げ出す。

重三郎は追いかける。

芭蕉の家。

芭蕉が昼間から酒を飲んでいる。

杯が空になる。

曾良が近寄り、注ぐ。

曾良はまた離れるが、その目はじっと芭蕉を見つめている。

芭蕉「…なあ、曾良よ」

曾良「…は」

芭蕉「…俺は…なんで…」

曾良「？」

芭蕉「モテないんだろうな」

曾良「…モテたいので、ございますか？」

芭蕉「いや、そうじゃねえよ…ただな…」

曾良「ただ？」

芭蕉「自分で言うことじゃあめんが…俺あ江戸どころか日本中に名を轟かす俳諧師だ。腕っ節もある…見た目だってそう悪くねーと思うんだが…」

曾良「はあ」

芭蕉「…なのにピクリともモテやしねえ…俺がモテねえってんなら、いったい

世間じゃどんな奴がモテるのかって…ちっと不思議に思ってたな」

曾良「なるほど」

芭蕉「案外、オメーみてーな優男が流行なのかもな」

曾良「私だってモテやしませんよ」

芭蕉「確かに、全く女の気配がねーもんな（笑）全く、世の女どもはいつてー

何処を見てやがるんだか」

曾良「…」

芭蕉「いっそのこと衆道に走っちゃまうか」

曾良「！」

腰を浮かす曾良。

芭蕉「…なんてな。俺はあの日以来肉欲を断ったんだ…そんなことするはずもねーさ」

残念そうに正座し直す曾良。

芭蕉「…しっかし、この家は誰も訪ねて来やがらねーな！女でも男でも良いから訪ねて来やがれってんだ」

曾良「ははは、ようするに、退屈なのですね？」

芭蕉「そういうこった（庭を見て）お、梅が見事だねえ」

曾良「はい？」

芭蕉「お？おお？来たぜ！」

曾良「はい」

曾良は矢立を取り出す。

芭蕉「紅梅や見ぬ恋つくる玉すだれ」

ドドソ。

曾良「お見事、ですが梅の季節には少々気が早いかと」

芭蕉「わかってんよ、そんなこと。あゝあ、誰か訪ねてこねーかなー」

曾良「ちよつと失礼」

曾良は立ち上がり門前近くまで移動。

門前では馬鹿吉が掃除をしている。

曾良は芭蕉には見せない鬼の形相で

曾良「…馬鹿吉、わかっていますね？ 誰か訪ねて来ても留守と言いなさい…もし女でも入れようものなら、殺しますからね」

馬鹿吉「へ、へい」

曾良は部屋に戻る。

馬鹿吉「おー怖っ」

下手側のエリアに明かり。

虚無僧がウロウロしている。

不審な行動。

虚無僧は芭蕉の家の方を見つめている。

虚無僧「…」

物憂げに溜息をつく虚無僧。

反対方向から誰かがやって来る。

思わず隠れる虚無僧。

やって来たのは高尾とちとり。

高尾「もし」

馬鹿吉「へい？ は！」

高尾「？」

馬鹿吉「…べっぴんだなあ」

高尾「ふふふ、ありがとうございます」

ちとりはムツとしながら通せんぼをするように高尾の前に立つ。

高尾「ちとり」

ちとりは渋々通せんぼを解く。

高尾「こちらは松尾芭蕉様のお住まいでしょうか？」

馬鹿吉「あ、へ、へい、そうですが」

高尾「芭蕉様は御在宅で？」

馬鹿吉「はい、あ、いえいえ！ いません！ いたことないです！」

ちとり「おいキノコ頭、吉原の高尾大夫がわざわざ訪ねてまいったのだ、居留

守など許しませんぞ」

馬鹿吉「吉原の？ 高尾大夫？ はゞ通りでべっぴんなわけだ」

ちとり「汚らわしい目で姉さまを見るな、あと人と話す時はキノコを取れ、無礼であるろ」

馬鹿吉「このキノコは取れねえんでい！」

ちとり「そんな馬鹿な話があるか、お前は馬鹿か？」

馬鹿吉「おうよ、俺様の名前は馬鹿田馬鹿吉でい！ このキノコは芭蕉の兄貴に

植えてもらったキノコだから外せねえし外すつもりもないんでい！」

ちとり「…え？ ホントにうわってんのそれ？」

馬鹿吉「ほんとだよ」

ちとり「…あ、あの、触ってもいい？」

馬鹿吉「そつとだよ」

ちとり、キノコを触る。

ちとり「姉さま！ 本物だ！ このキノコ、生きてる！」

馬鹿吉「お嬢ちゃん、俺のキノコが触りたかったらいつでも遊びに来な」

ちとり「うん！」

以降、ちとりは隙あらばキノコを触ろうとする。

高尾「馬鹿吉様、高尾が参つたと芭蕉様にお伝え頂けませんか？」

馬鹿吉「へい！ そりやあもう！ ああ！ 駄目だ駄目です！ そんなことしたら

俺が殺されちまう！」

高尾「殺される？」

部屋の中。

芭蕉「なんだか騒がしいな…おい！ 馬鹿吉！ 客人かい？」

曾良「…私が見てきましよう」

曾良が門前までやって来る。

曾良「馬鹿吉、何を騒いで…」

高尾「…先日はありがとうございます」

深々と頭を下げる高尾、釣られてちとり。

曾良「………馬鹿吉、このブスは誰です？」

ちとり「な！ 貴様！ 今なんと言った！」

曾良「………ブス、と」

ちとり「き、貴様、先日の吉原での一件を忘れたのか？」

曾良「…馬鹿吉、この小ブスはなんだ？」

ちとり「こ、小ブスだと！ よく見ろ！ そこそこかわいいであろう！」

曾良「物乞いはお断りだ、帰られよ」

曾良は部屋の中に戻ろうとする。

高尾「…おい」

曾良「？」

高尾「…物乞いとはなんだい物乞いとは！ 吉原の高尾を物乞い扱いするたあ、
てめえいったいどういう了見だ、このすつとどつこい！」

曾良「いや、あの…」

高尾「言わせない）だいたいテメーの顔はハナっから気に入らなかつたんだ！

松尾芭蕉にひつついて回ってるだけの表六玉の腰巾着が！」

曾良「いや、言い過ぎじゃ…」

高尾「言わせない）おうおうおう！何か言いてえことがあるんならそのひらべってえ顔で啖呵きってみやがれ！この冷や飯食らいのぼんくらのたわけもんのぼせもんの芋っぼりの宿六が！」

曾良「…」

静かに鉄扇を出して高尾に襲いかかろうとする曾良。

馬鹿吉は必死に止めて

馬鹿吉「兄貴！曾良の兄貴！相手は女だ！それだけはいけねえ！」

高尾「おうおうおう！やれるもんならやってみねえ！」

馬鹿吉「(曾良を止めながら)アンタも煽らないの！ちよつと、誰か止めて！」

虚無僧が走って来て

虚無僧「あいや！あいや！待たれよ！」

曾良「…なんですか、あなたは？」

虚無僧「わざわざ訪ねて来た女性を追い返すとはなんと無体なことを。貴殿はそれがかまわぬかもしれぬが、このような噂はすぐに広まり、主人である芭蕉殿の評判を下げますぞ」

曾良「…」

虚無僧「ここは一つ、拙僧に免じて…」

芭蕉がやって来る。

芭蕉「なんだか威勢の良い啖呵が聞こえてくると思ったら高尾太夫かい」

高尾「…その節は」

深々と頭を下げる高尾。

芭蕉「こんなところで立ち話もなんだ、中に入りな」

曾良「！」

芭蕉「あー、それから、そこの坊さんも、良かったら入りなよ、袖すり合うも
多生の縁ってやつだ」

芭蕉は部屋へ入って行く。

憮然としている曾良。

高尾、ちどり、馬鹿吉、虚無僧が中に入って行く。

【ブリッジ】

猫じゃらしを持った重三郎がふさをおびき出そうしている。

重三郎「るーるるるる」

なかなか出て来ないふさ。

ドリフのように背後から現れるふさ。

重三郎にドロップキックをかます。

激しく吹っ飛ぶ重三郎。

重三郎「…そこにいたのかあ！ ふさ！」

嬉しそうに追いかける重三郎。

勘弁してくれよという感じに逃げるふさ。

芭蕉の家。

芭蕉、曾良、高尾、ちとり、馬鹿吉、虚無僧が座している。

芭蕉「で？ 用件はいったいなんだい？」

高尾「…はい」

芭蕉「三浦屋の高尾太夫が大門を越えて深川くんだりまで訪ねて来るなんてのは…こいつは余程のことだぜ…：さてはあんた、俺に惚れたな？」

高尾「いいえ」

芭蕉「…」

馬鹿吉「兄貴、そういうところですが、モテねえ理由は」

芭蕉「うるせえ！」

曾良「芭蕉殿に惚れたわけではないと？」

高尾「はい、ちつとも」

曾良「なるほど…芭蕉殿、太夫のお話を聞きましょう。美人の頼み事はなんでもかんでも聞くべきです」

ちとり「あんた、さつきブスって…」

曾良「(懐から取り出し) こちらの美しいお嬢さんには金平糖をさしあげよう」
ちとり「わあ！ 甘いものくれる人好き！」

犬のように直接口を与える曾良。

芭蕉「…それで？ 惚れたわけでもねーなら、なんでわざわざこんなところまで？」

高尾「…お願いごとがあつて参りました」

芭蕉「…お願いごとか…厄介ごとの間違いじゃねーのかい？」

曾良「芭蕉殿」

芭蕉「だつて惚れたわけでもねーならなんも良いこと…」

曾良「最後まで聞きましょう。太夫…」

高尾「…先日は、お助け頂いて、本当にありがとうございました」

芭蕉「ああ、あれは良いんだ。ありやあ一見人助けに見えて実は体のいい食
い逃げだからな」

ちとり「ま！」

曾良「金も無いのに三浦屋などにあがるからです、私は反対したんですよ」

高尾「（微笑み）助けて頂いたのです、御足は頂けません」

芭蕉「そうかい、じゃあもつと飲み食いしておくんだったなあ（笑）」

高尾「ぜひまたお越し下さい、その時にまた改めて御礼を」

芭蕉「おう、そうしよう」

曾良「…太夫、それで？」

高尾「はい、あのととき、私を襲った男を覚えてらっしゃいますでしょうか？」

芭蕉「おう、あの仙台訛りの侍連中だろ？へたくソな町人芝居してやがった」

高尾「はい…実は…あの男の正体は…」

曾良「仙台藩 藩主、伊達綱宗」

高尾「…御存知でしたか」

芭蕉「おいおい、俺は御存知じゃねーよ、なんでえ曾良、それを知っていなが

らなぜ俺に言わねえ？」

曾良「それを聞いたら喜んで喧嘩をおっ始めるでしようが」

芭蕉「たりめーよ！喧嘩の相手はデカければデカいほど面白れーじゃねーか！」

曾良「だから言わなかつたんですよ」

芭蕉「ふん、しかしまあ、アンタも面倒な奴に見初められたもんだな」

高尾「…はい…その上…」

芭蕉「ん？」

ちとり「綱宗公から姉さんを身請けしたいとの申し出があったのです」

曾良「…身請け」

馬鹿吉「そいつは厄介なことになりやしたね」

芭蕉「なんでだよ、嫌ですのひと言で断っちまえばいいじゃねーか」

虚無僧「仙台藩と言えば60万石の大藩、綱宗公は幕閣や朝廷への影響力も強

い。身請けを断ればどのような圧力をかけてくるか…」

曾良「三浦屋だけではなく、吉原そのものへ圧力をかけてくるかもしれません

ね…」

沈黙。

芭蕉「…なるほどねえ…それで？頼みってのはなんだい？まさか俺に足抜けの片棒でも担がせようってのかい？」

高尾「…いいえ…お願いしたいのは…あるお方の命を守って頂きたいのです」

芭蕉「…ほう…あるお方ってのは？」

高尾「…島田重三郎様」

芭蕉「…そいつとあんたの関係は？」

高尾「…」

芭蕉「…いい人ってわけかい？」

高尾「…はい」

芭蕉「…そいつは、なんで命を狙われてるんだい？」

高尾「…綱宗公は嫉妬深い方なのです」

芭蕉「…なるほどな」

高尾「…私が身請けされることで三浦屋を守ることが出来ます。ですが、私に

は重三郎様を守る手だてがありません」

芭蕉「おいおい、あんた、身請けされるつもりなのかい？」

ちとり「姉さま！」

高尾「私一人の命で三浦屋が救えるのなら安いものじゃない」

ちとり「…でも」

高尾「…ちとり、私がいなくなったらあんたが三浦屋を盛りたてていくんだよ」

ちとり「…でも、私…」

高尾「立派になって、いつか高尾の名を継いで頂戴ね」

ちとり「…姉さ〜ん」

むせび泣くちとり。

芭蕉「…太夫、あんた死ぬ気か」

高尾「…」

芭蕉「…ふん、良いね」

高尾「…？」

芭蕉「天下の伊達家相手に喧嘩しようって言うんだ、その喧嘩、助太刀するぜ」

高尾「…ありがとうございます」

深々と頭を下げる高尾。

芭蕉「…だが、最初から負けるつもりで命を張るのは頂けねえな。そんな喧嘩は粹じゃねえ」

高尾「…と、申しますと」

芭蕉「喧嘩つてのは勝つてなんぼの世界だからよ」

芭蕉は立ち上がり

高尾「どちらへ？」

芭蕉「まずは、あんたのいい人に会いに行こうじゃねえか」

高尾「はい！」

芭蕉は行きかけて

芭蕉「…そうだ太夫、一つ聞きてえことがあるんだが」

高尾「なんでございましょう？」

芭蕉「…女の目を見て、俺のどこがいけないのか教えてくれねーかい？ あまりにもモテなくてモテなくて、これは何か理由があるに違いねえと思うんだが」

高尾「(笑) 芭蕉様がモテないのは当然でございます。だって、芭蕉様は衆道なのでございましょう？」

芭蕉「何？ 衆道？」

ちとり「衆道ってなんですか？」

馬鹿吉「男好きの男っていう意味だよ」

ちとり「ま！」

芭蕉「おいおい、勘弁してくれよ、俺には衆道の気なんてポチリともありやしねーぞ」

高尾「そうなんですか？ でも、みんなそう噂してますよ」

芭蕉「どうりで女が寄ってこねーわけだ。全く、いったい誰がそんな噂を」

曾良が客席の方を向き悪い顔で棒読みで

曾良「はっはっは、全く、江戸の不思議目ですな」

芭蕉「ちげーねえ。(虚無僧に)おうアンタ、悪いが、ちっと出かけて来っけど、すぐ帰って来るから、ちよっと待ってておくんな。馬鹿吉、おめーは留守番を頼むぜ」

馬鹿吉「へい」

芭蕉、曾良、高尾、ちとりが出て行く。

馬鹿吉「お茶でも出しやしようかね」

馬鹿吉もいなくなる。

家の外で様子を伺っていた半六が現れる。

半六「…」

半六がいなくなる。

橋の下。

戸兵衛と蔵人がやって来る。

臭気に鼻を被う戸兵衛。

戸兵衛「…このようなところに、まきをが？」

蔵人「…ああ、心を壊してしまつてな」

戸兵衛「…」

蔵人「まきをを、いるか？」

乞食同然の格好をした夜鷹のまきをが現れる。
手にはごぎ。

まきをを「お客さんかえ？」

蔵人「お前の兄の蔵人だ」

まきをを「おお、いつもありがとう、お代は24文、先に頂戴するよ」

まきををはごぎを敷いて準備を始める。

戸兵衛「…なぜ…このようなことに」

蔵人「…小助が死んでからずっとこうだ…何度家へ連れ帰ってもここへ戻つてきてしまう」

戸兵衛「…そうか、この橋は…」

蔵人「ああ、あの戦の前に我らが集つた場所…まきををが最後に小助を見送つたのも…この場所だ」

戸兵衛「…夜鷹に身をやつしてまで帰らぬ小助をここで待っているのか…惨い」

蔵人「…あの戦より後、生き残つたものは多かれ少なかれ似たようなものだ」

戸兵衛「…すまぬ…俺はそんなことも知らずに…」

蔵人「言うな。お前は黒脛巾組の名譽を回復しようと奔走していたのだろう」

戸兵衛「…」

蔵人「お前は戦い続けていた…俺は…何処かで折れたのかもしれない」
まきを「しないのかえ？」

蔵人「…あの戦は…何かがおかしかった」

戸兵衛「…ああ」

まきを「なあ、抱いておくれよ…お代はいらないから」

戸兵衛「…」

蔵人はまきをの肩を抱き

蔵人「…まきを」

まきを「痛いのは嫌だよ…優しくしておくれよ」

蔵人「…お前の力を借りたい」

まきを「ええ？ いいよ、そのかわり抱いておくれよ」

蔵人「…敵の名は…松尾芭蕉…かつての名は…」

まきを「…？」

蔵人「…伊賀の甚四郎」

まきを「…伊賀の…甚四郎？」

蔵人「…そうだ…お前の夫、小助の命を奪った男だ」

まきを「…伊賀の甚四郎…小助…私の夫…小助…小助様！」

まきをが絶叫する。

狂ったように叫び、走り去るまきを。

戸兵衛と蔵人が後を追う。

場面は十年前の戦にすり替わる。

数名の黒脛巾組を駆逐しながら芭蕉と伊代が現れる。
二人は戦いながら

芭蕉「どうなつてんだ！なぜこんなところに忍が！」

伊代「そんなこと！私を知るわけがないだろう！」

芭蕉「…コイツらはいったい…」

伊代「…黒革の脛当て…伊達の忍！」

芭蕉「黒脛巾組か！何故黒脛巾組がこんなところに！」

伊代「だから！私に聞いたって知るものか！」

芭蕉と伊代がいなくなる。

戸兵衛と蔵人が駆け込んで来る。

戸兵衛「どういうことだ！何が起きている！」

忍A「伊賀者が待ち伏せを！」

戸兵衛「伊賀者が？」

蔵人「…おかしい…我らは鷹狩りの勢子として集められたのであろう？何故伊賀者が襲ってくるのだ！」

襲いかかって来る伊賀者を駆逐する戸兵衛と蔵人。

戸兵衛と蔵人がいなくなる。

遠い場所から高みの見物をしている綱村、惟足、曾良。

惟足「どうです？面白い見せ物でしょう？」

綱村「…」

惟足「…忍とは愚かな生き物ですな、餌を投げたら勝手に争い始める、まるで
獣」

綱村「…いったい、どのような餌を？」

惟足「簡単なことです。偶然蜂合うようにそれぞれ偽の情報を与える。そして、ここぞという時を見計らって連中の仲間の死体をそれぞれの陣営に投げ込む。仲間の死体を見て動揺しているところで見知らぬ集団と遭遇する…すると御覧の通り、あとは勝手に殺し合います」

綱村「…なるほど」

惟足「重要なのは死体を投げ込む頃合い、早過ぎても遅過ぎてもいけない(笑)」

綱村「…伊達家の責任が問われるやもしれません」

惟足「黒脛巾組が勝手に暴走したことにすれば良いのです」

綱村「…我が伊達家の損失は大きいはずぞ？ これで黒脛巾組は解体せねばなりません」

惟足「江戸城を守る伊賀者を弱体化させる為です。多少の犠牲はやむを得ません」

綱村「…しかし」

惟足「損失分は補填しましょう、幾らでも好きな金額を言って下さい、薩摩の島津家から送らせます」

綱村「なんと、島津家から？」

惟足「琉球支配で相当儲けているのです」

綱村「惟足殿は島津家とも繋がっているのですか？」

惟足「島津家だけではありません。長州の毛利家を始め、徳川家に恨みをもつ藩とは朝廷を中心に繋がっているのです」

綱村「…なんと」

惟足「これで、あなたもお仲間ですよ」

綱村「…は」

惟足は高笑いをしながらいなくなる。

綱村「…ふふふ、恐ろしいお方じゃな」

曾良「…」

綱村もいなくなる。

曾良は戦の行方を眺める。

曾良「…」

惟足達とは反対方向に消える。

伊代と蔵人が駆け込んで来る。

二人の戦い。

互角の腕前。

二人は間合いをとり

蔵人「…何故だ？ 何故、伊賀が我らを襲う」

伊代「先に仕掛けてきたのは貴様等の方であろう！」

蔵人「…話しにならぬ！」

再び刃を合わせる。

黒脛巾組忍が数名駆けつける。

半六が駆けつけて加勢するが多勢に無勢。

半六「…ここは一旦」

伊代「…ちっ」

伊代は走り去る。

蔵人「追え！ 俺は小助を探す」

忍A「は！」

黒脛巾組忍が走り去る。

蔵人「…何処だ…小助」

蔵人が走り去る。

芭蕉と戸兵衛が戦いながらやって来る。

互いに互角。

一度離れる二人。

芭蕉「…やるねえ」

戸兵衛「…貴様もな」

芭蕉「…なあ、あんた…この戦、何か変だと思わねえか？」

戸兵衛「…」

芭蕉「…黒脛巾組が…伊達家が徳川に喧嘩を売る理由が何処にある？ 戦国の世でもあるめーし」

戸兵衛「…」

芭蕉「…やめにしねーか？」

戸兵衛「…そんなこと…出来るはずがなろう！」

戸兵衛が襲いかかる。

躲す芭蕉。

芭蕉「…出来るか出来ねえかはやってみなくちやわかんねーだろうが！」

二人は渡り合い、芭蕉が優勢になり、ついには戸兵衛を追いつめる。

戸兵衛「…殺せ」

芭蕉「…そうはいかねえ」

芭蕉は刀を納める。

戸兵衛「貴様！ どういうつもりだ！」

芭蕉「…やめだ…俺はこの喧嘩から降りる」

戸兵衛「！」

芭蕉「…お互い間違った時代に生まれちゃったのかもなあ…大義がねえよ…」

戸兵衛「…大義」

芭蕉「…忍びには…生きにくい世の中になっちまったな…」

戸兵衛「…」

芭蕉「…俺の名は伊賀の甚四郎、縁があつたらまた会おう」

芭蕉が走り去る。

戸兵衛「…忍が…忍が名乗るなあ！」

傷だらけの黒脛巾組忍がやって来る。

忍A「…お頭」

倒れる忍を戸兵衛が抱える。

戸兵衛「しつかりしろ！」

忍A「…味方は…もうほとんど…小助様も…」

戸兵衛「…小助が？」

忍A「…甚四郎と名乗る者に額を撃ち抜かれ…あえなく…」

戸兵衛「…甚四郎」

忍A「お頭あ！ 我らの…敵を…」

戸兵衛「…ああ…ああ！ だからもう何も言うな」

忍A「…」

息絶える。

戸兵衛「…」

蔵人が駆け込んで来る。

蔵人「小助え！ 小助は何処じゃあ！」

襲いかかって来る伊賀者を倒しながら小助を探す蔵人。

戸兵衛が蔵人を羽交い締めにする。

戸兵衛「蔵人！ ここは引け！」

蔵人「ならん！ 小助を！ 小助を助けなければ！ まきをの元に小助を連れて帰るのだ！」

戸兵衛「小助は死んだ！ 死んだんだ！」

蔵人「…そんなこと信じられるかあ！ 小助え！ 小助え！」

戸兵衛が蔵人を強引に連れていく。

静寂がおとずれる。

辺りには累々と死体が転がっている。

曾良が現れる。

曾良は遺体を見つめ、痛ましげな表情を浮かべる。

曾良「…」

芭蕉がやって来る。

ごぎに包まれた誰かを抱えている。

伊代が追って来る。

その背後には半六。

伊代「待て！ 甚四郎！」

芭蕉「…」

伊代「…その者をどうするつもりだ？」

芭蕉「…まだ息がある…救えるかもしれない」

伊代「…敵を助けるというのか？」

芭蕉「…敵…敵か」

伊代「…？」

芭蕉「…伊代…敵とはなんだ？ 味方とはなんだ？」

伊代「…何を言っている」

芭蕉「…ここに転がっているのは…敵か味方か？」

伊代「…」

芭蕉「…どちらでもない…ここにあるのは死体…ここにあるのは死だ！」

伊代「…」

芭蕉「…ついさつきまで共に笑っていた仲間が…今はただの骸…ただの屍…ただの死だ！…この死になんの意味がある？」

伊代「…」

芭蕉「…俺は虚しくなったよ…忍は…やめる」

伊代「…抜けるというのか？」

芭蕉「…ああ」

伊代「…伊賀の掟は抜け忍を許さない…その先にあるのは死だ」

芭蕉「…ふん、また死か…殺したければ殺せ」

芭蕉は歩き出す。

半六が襲いかかろうとする。

芭蕉はひと睨みし

芭蕉「お前が俺をやろうなんざ十年早えぞ、半六」

半六「…」

伊代「何処へ行くつもりだ」

芭蕉「…さあ、何処かな…少なくともここじゃない何処かだ」

伊代「…」

芭蕉「…死から一番遠い場所は何処なんだろうな…（笑顔で伊代に振り返り）
侍にでもなっちまうか…」

歩き出す芭蕉。

一瞬だけ曾良と目が合う。

曾良「…」

芭蕉がいなくなる。

伊代「…私に…お前が殺せるはずがないじゃないか…甚四郎」

曾良は伊代と目が合う。

伊代はいなくなる。

曾良「…死から一番遠い場所、か」

曾良もいなくなる。

芭蕉宅。

馬鹿吉と虚無僧がいる。

虚無僧「そのようなことが…」

馬鹿吉「あんまりその頃のことは話したがらないけどね、兄貴」

虚無僧「…の割には見て来たように申しますな」

馬鹿吉「あゝ曾良の兄貴に聞いたんだったかなー…ともかく、兄貴はその戦以來忍びをやめて、そんでまあ侍になることを選んだってわけ」

虚無僧「…でも、その侍もやめた」

馬鹿吉「それだって色々あったんだぜ。兄貴は殿様の命令で尊敬していた良忠様って人を斬らなくてはならなくなっさ」

虚無僧「…それで…その方を…斬ったのですか？」

馬鹿吉「うん、斬ったって」

虚無僧「……そうですか」

馬鹿吉「ああ、斬ったって言っても介錯っていうの？ 腹を切ったらしいんだよ、その良忠様って人が。介錯しないと苦しんじゃうんでしょ？ だから斬ったって」

虚無僧「……そう…なのですか？」

馬鹿吉「それでも殺しには違いないって…忍をやめる時に「もう殺しはしない」って誓ったのに、それを破っちまったって」

虚無僧「…」

馬鹿吉「…せつねーんだぜ、兄貴。良忠様の妹の、貞様って言うんだけど、綺麗な人でさ、二人は恋仲だったのに…そんなことになっちまったから…」

自分の兄を殺した男が近くににいるなんて耐えられないだろうって…それで侍をやめたんだ」

虚無僧「…」

馬鹿吉「…兄貴…本当に貞様のことを好きだったんだよ…」

グスグス泣き始める馬鹿吉。

虚無僧もグスグス泣き始める。

馬鹿吉「…それ以来兄貴は、操を立てるっていうの？ 貞様以外は誰も愛さないって誓っていまだに守り続けてるんだ…まあ、元々モテないから守ろうとしなくても守れちゃうんだけど」

更に激しく泣く虚無僧。

馬鹿吉「…俺も泣き虫な方だけどアンタも大概だね。ほら、これ使いなよ」
手ぬぐいを渡す。

虚無僧は深編笠を脱ぎ

虚無僧「…ありがとう」

馬鹿吉「どういたしまして…って貞様！」

貞「…馬鹿吉…お久しぶりです」

場面が切り替わる。

蔵人の家。

戸兵衛と蔵人がいる。

蔵人「…それで、その重三郎というのは何者なのだ？」

戸兵衛「…高尾太夫の男なのだとか」

蔵人「なんだ、男の嫉妬か…下らない。そんなことの為に黒脛巾組が動かねばならんとはな…」

戸兵衛「…」

蔵人「まあ良い、今は伊達家の信頼を勝ち取らねばならぬ時なのであろう？
く　　だらぬ仕事もするさ」

戸兵衛「…すまん」

蔵人「…ただの浪人風情、俺とお前で行けばすぐにかたがつくであろう」

戸兵衛「重ねて言うが、狙いはあくまで重三郎。甚四郎とは適当にやりあって
　　引き上げる…良いな？」

蔵人「わかった、そう何度も言うな」

まきをが現れる。

色気漂う美しい姿になっている。

蔵人「おお」

戸兵衛「…見違えたぞ…いや、元のまきをに戻ったというべきか」

まきを「…兄上…柳原様…御迷惑をおかけいたしました」

蔵人「…大丈夫なのか？」

まきを「…はい…まきをは…夢を見ていたようです」

戸兵衛「…夢か」

まきを「…はい…夢の中で…小助様と楽しく暮らしておりました」

蔵人「…まきを…小助は…」

まきを「…わかっております…小助様はもうこの世にはいない…」

沈黙。

戸兵衛「…伊賀の甚四郎の正体がわかった。今は松尾芭蕉と名を変え俳諧師として暮らしている」

まきを「…松尾芭蕉…その者が小助様の敵なのです」

戸兵衛「そうだ」

まきを「…わかりました…見事籠絡し、この手で仕留めてみせましょう」

戸兵衛と蔵人は顔を見合わせ

蔵人「…まきをよ、そう頼みたいところなのだが」

まきを「？」

戸兵衛「…調べてみると…松尾芭蕉は…どうやら衆道のようなのだ」

まきを「…衆道」

戸兵衛「うむ…なので恐らくお前の色香をもつても…」

まきを「…そうですか」

蔵人「…そこで、お前に頼みたいのは…」

まきを「？」

戸兵衛「芭蕉の身边を警護している弟子がいる。滅法腕が立ち、その者が傍にいる限り芭蕉を討ち取ることは難しい。まきにはそ奴を頼みたい…その者の名は、河合曾良」

まきを「…河合曾良」

蔵人「…曾良を誘惑し芭蕉と引き離してくれ…その間に我らが芭蕉を仕留める」

まきを「…わかりました…ですが…」

戸兵衛「？」

まきを「…芭蕉への最後のひと太刀は…このまきをに…」

戸兵衛「…わかった、約束しよう」

まきをはあらぬ方に向かって

まきを「…ふふふふ…小助様…待っていて下さいね…すぐに戻りますから…芭

蕉の首を手土産に…」

重三郎の家。

重三郎の傍にはふさがいるが、ふさは重三郎を完全に舐め切っている態度。

芭蕉、曾良、高尾、ちとりがいる。

犬に小馬鹿にされている重三郎を見て

芭蕉「…コイツが？」

高尾「はい、重三郎様です」

芭蕉「…」

怪訝な表情を浮かべる芭蕉と曾良。

重三郎「なにになになに？ 高尾、この人達誰誰誰？」

高尾「天下に名高い松尾芭蕉様でございますよ、重三郎様」

重三郎「へ？ほんとに？ほんとに？ おお〜！ うえーい！」

芭蕉の身体をぺたぺた触る。

ノリが気持ち悪い。

高尾「重三郎様のことを守って下さるそうです」

重三郎「へ？守ってくれんの？あ、そうか、俺、狙われてるんだっけ？あ〜

そうなんだそうなんだ〜、おお〜、うえ〜い！」

芭蕉「(ちとりに)おい、お前の姉さんの趣味ってどうなってんだ？」

ちとり「こればかりは私にもわかりませぬ」

芭蕉「…こんな男の為に吉原の高尾太夫が命を張ろうっているのか…曾良、こ

んな奴がモテる世の中なら俺はモテなくてもかまわねえ」

ふさが曾良に近寄って腰をかくかくさせる。

「どうやら曾良のことを気に入ったらしい。

芭蕉「はっはっはっ！ お前犬にはモテるらしいな！ いや、羨ましいぞ色男！」

曾良「（殺気を出しながら）…犬は…煮て食うと美味いらしいですな」

重三郎「やめて、やめてよ、食べないで、食べないでよ」

ふさが気配を察知し突然遠吠えを始める。

芭蕉「お？」

曾良「…芭蕉殿」

芭蕉「ああ、この犬、ただの馬鹿犬じゃねーみてーだな」

重三郎「なにになになに？ ふさは頭良いよ？ 良い子だよ？」

芭蕉「ああ、少なくとも、アンタよりは頭が良さそうだ…曾良、太夫とちとりを」

曾良「はい」

曾良が太夫とちとりの傍へ寄る。

芭蕉「…さて」

芭蕉が仕込み杖を構える。

重三郎「何何何？ どういうこと？」

突然、重三郎めがけて戸兵衛と蔵人が襲いかかる。

芭蕉は二人の斬撃を受け、返す。

重三郎「うわーーーーー！！」

尻餅をつく重三郎。

高尾やちとりは悲鳴。

芭蕉「うー…手が痺れた…強えな、アンタら」

戸兵衛「…松尾芭蕉…いや、伊賀の甚四郎！」

芭蕉「おうおう、その通りだが、自分でもややこしいからどっちか一つに絞ってくんねえか？ なんなら宗房でもいいぜ」

蔵人「…貴様が伊賀の甚四郎か」

芭蕉「おう、それでいくかい？ しまあ、よくその名を知ってるな」

戸兵衛「…この顔を忘れたか」

芭蕉「…忘れた…と書いてえ所だが、覚えてんよ。あんただったのか、通りで強えはずだ…名前はなんつったつけ？」

蔵人「甚四郎！ 死ねえ！」

蔵人が芭蕉に襲いかかる。

戸兵衛「待て！」

戸兵衛の制止も聞かず芭蕉に襲いかかる蔵人。

芭蕉と蔵人の戦い。

蔵人「小助の敵！」

芭蕉「あん？ 誰だ？ 小助って」

蔵人「…十年前…貴様に殺された…我が義弟だ！」

芭蕉「…十年前…あの戦か…あれは不幸な戦だった」

蔵人「小助は…貴様が…」

芭蕉「悪いが覚えてねえ、あん時は何人も斬ったからな」

蔵人「貴様ア！」

芭蕉「…そうかい…俺があんたの弟をね…そいつは済まなかった…だが！」

芭蕉の一撃が蔵人を吹き飛ばす。

芭蕉「…あん時は俺も仲間を失った…何人もな…だからって許しちゃくれねえだろうが」

蔵人「当たり前だろうがア！」

蔵人の攻撃を受け止めるが吹っ飛ぶ芭蕉。

吹っ飛んだ先にいたふさが驚いて逃げる。

芭蕉「なんつー馬鹿力だ畜生」

重三郎「あ！ふさ！」

追いかける重三郎。

高尾「重三郎様！」

戸兵衛「追うぞ！」

蔵人「くっ！」

戸兵衛と蔵人は重三郎を追う。

曾良は立ち上がろうとする芭蕉を制し

曾良「私が追います、芭蕉庵で落ち合いましたよ！」

芭蕉「無理はするなよ」

曾良「はい」

曾良が走り去る。

ふさが駆け抜ける。

重三郎がふさの名を呼びながら駆け抜ける。

戸兵衛と蔵人が現れる。

蔵人「何処に消えた！」

戸兵衛「…あの者、我らより足が速いとは…何者だ？」

蔵人「…とにかく追うぞ」

戸兵衛「ああ」

重三郎が向かった方角とは別の方角を目指していなくなる。

曾良がやって来る。

曾良「…いったい…何処へ…」

しばらく周囲を探す。

まきをが現れる。

曾良はまきをに近寄って行く。

まきを「…あ」

まきをは何かにつまづいて転ぶ。

着物の裾が（わざとらしく）はだけ、エロい感じになる。

曾良は全く気づかない様子で

曾良「もし、この辺りで馬鹿そうな犬と馬鹿そうな男を見かけませんでしたか？」
まきを「…さあ…見ておりませんが」

曾良「…そうですか、失礼」

行きかける曾良。

まきを「…あ、お待ち下され」

追おうとするまきを。

曾良「？」

まきを「あ」

再び転び、そんなわけねーだろという感じに肩があらわになる。

じっと見る曾良。

曾良「…」

まきを「…」

更にエロを追加するまきを。

曾良「…よく見えていて下さいね」

まきを「？」

曾良「…こうで…こう…で、こうして…こうじゃないですか…それから…こう
なつて…こうです…わかりましたか？」

まきをの誘惑を、まきをよりも色っぽく再現する曾良。

曾良「…筋は悪く無いので今教えたことを忘れずにおさらいしておいて下さい。
きつと今より稼げると思います、でわ」

行こうとする曾良。

まきを「え？ え？ え？ ちょ、ちよつと！」

曾良「なんですか？ 急いでいるのですが」

まきを「え？ 嘘でしょ？ 全然？ そんなわけないよね？」

もう一回エロを試すまきを。

曾良は無然として

曾良「ですから…」

まきを「ああ！ やめて！ 手本を見せないで！ 女としての尊厳が音をたてて崩れていくから！」

曾良「…そこそ良い女ではあると思いますが…ですが、そこそこです」
まきを「…そこそこ」

曾良「先程も言いました通り筋は良いと思います。磨けばまだまだまだ光るでしょう。良いですか？ 女の道は一朝一夕にはいきません。日々精進して、これから女の道に磨きをかけて下さい。では、今日のお稽古はこれまで」

まきを「ありがとうございますってちがー！ー！う！ 女！ こつちが女！ 比較的良い女！ すれ違ったら「おっ」て、割と振り返られる感じの良い女！
なんか自分でこんなこと言っちゃってもんのすごく恥ずかしいんだけど」

曾良は「わからない人だな」という具合に頬をぷくりと膨らます。

まきを「なにそれ！ なにそのプクッって！ そんなのもかわいいじゃん！」

曾良「…差し上げます」

まきを「いらないわよ！」

曾良「…あの、あなたなんなんですか？」

まきを「あんたよ！ あんたが、そんな（言葉に詰まって）わー！ー！」

曾良「…すいません、もうちよつとなんか怖い感じなんで、失礼します」
まきを「ちよつと！」

行きかける曾良の前に半六が現れる。

半六「…」

曾良「…あなたは」

まきをが吹き矢を放つ。

曾良の首筋に命中し倒れる。

ふさがやって来て曾良にかくかくする。

まきをはふさもついで吹き矢で倒す。

半六「見事な腕前だな」

まきを「…」

半六「…どうしたのだ？」

まきをは試すようにチラリと裾をめくる。

目を剥いて凝視してしまう半六。

裾を戻して、目を戻して、また裾をめくって、目を剥いてという動作を何度か繰り返す。

まきを「…うん、やっぱりその男がどうかしているのね」

まきをがいなくなる。

半六「…いかんいかん、俺は伊代様一筋なのだ」

半六が曾良を担いで去る。

芭蕉庵。

貞と馬鹿吉がいる。

馬鹿吉「いやいや貞様！ そいつはいけない、いけないというよりあっしにはさっぱり意味がわからねえ」

貞「いいえ、私はもう決めたのです」

馬鹿吉「でも、兄貴のことを愛してるんですがしょ？」

貞「…はい」

馬鹿吉「だったら…」

貞「…あの時…私は…愛する宗房様のことを信じる事が出来なかった」

馬鹿吉「昔の話しじゃねえですか」

貞「…愛というのはそんなに生易しいものではありません…一度愛すると誓ったからには死ぬ覚悟で愛し続けなければならぬもの…」

馬鹿者「愛つてのはそんなに難しいもんなですかい？」

貞「ええ」

馬鹿吉「…そういうもんですかい」

貞「…馬鹿吉、あなたは誰かを愛したことはないのですか？」

馬鹿吉「…それを言われちまうと…俺には芭蕉の兄貴と出会う前の記憶がありませんし」

貞「…そうでしたね」

馬鹿吉「…でも…こういう話しを聞くとなんだか胸が痛えますよ」

貞「…ひよっとしたら…過去に誰かを愛したことがあるのかもしれないね」

馬鹿吉「…かもしれないねーです…だからってわけじゃねーですけど、愛し合ってるお二人には幸せになつて欲しいんですよ」

貞「…それはなりません」

馬鹿吉「そんな、芭蕉の兄貴も貞様のことを…」

貞「もう良いのです馬鹿吉…私は…宗房様の傍にいられるだけで…（改めて）良いですか馬鹿吉、私の正体、宗房様には決して明かしてはなりませんぞ」

馬鹿吉「でも…」

人が来る気配。

貞「馬鹿吉、もし私の正体を明かしたら…殺しますからね」

馬鹿吉「みんなオイラを殺そうとするなあ」

貞は慌てて元の虚無僧姿に戻る。

芭蕉と重三郎が帰って来る。

馬鹿吉「お帰りなさい」

芭蕉「…曾良は？」

馬鹿吉「まだ帰って来てませんが…一緒じゃなかったんですかい？」

芭蕉「…アイツの方が先に戻ってねえと勘定が合わねえんだが…」

馬鹿吉「…そちらの御仁は？」

重三郎「島田重三郎と申します…それから…島田重三郎と申します」

馬鹿吉「今聞きましたが…なんだかぼうつとした人ですがね？」

芭蕉「…高尾大夫を吉原に送り届けたあと、コイツが川っぺりでしょんぼりしているのを見つけてな…」

重三郎「…嗚呼…ふさ…」

芭蕉「馬鹿野郎！ 犬のことより太夫のことを心配しやがれってんだ！ もう会

えねえかもしれねえんだぞ！」

重三郎「…」

芭蕉「ちっ」

馬鹿吉は貞をチラ見して

馬鹿吉「…あのう…兄貴…実はですね…」

芭蕉「？」

貞が苦内を光らせる。

馬鹿吉「…実は…実は…あっし…馬鹿なんです」

曾良が心配で無感動の芭蕉。

芭蕉「…そうか、そいつは知らなかった」

貞が苦内を納める。

馬鹿吉「…」

芭蕉「…曾良…無事だといいが…」

場面が切り替わる。

伊達家上屋敷。

戸兵衛が綱村に報告している。

そこに綱宗が愉快そうに家臣をぶん投げながら現れる。

綱村「父上」

綱宗「おう綱村、首尾はどうじゃ？」

綱村「…芭蕉の弟子、河合曾良を捕えたそうです」

綱宗「ほう、そうか！ それはでかした。即刻首をはねよ」

綱村「…父上、まだ芭蕉や島田重三郎が残っているではありませんか、ここは河合曾良を利用しておびき寄せるのが上策では？」

綱宗「おうおう、我が息子は諸葛孔明であったか、なるほどなるほど、良きに計らえ」

高笑いをする綱宗。

綱村「…父上、嬉しそうですな」

綱宗「高尾太夫が身請けを了承したのじゃ、こんなに嬉しいことはない！」

高笑いをしながら家臣を投げ飛ばして去る綱宗。

綱村「…戸兵衛：貴様、家族はいるのか？」

戸兵衛「…いえ」

綱村「そうか、それはいい…愚かな肉親などおらぬ方が良い」

綱村が去る。

蔵人が現れる。

蔵人「…あのような者達の為に働かねばならぬのか」

戸兵衛「…」

蔵人「…なあ戸兵衛、甚四郎を倒したのち…お前は どうするのだ？」

戸兵衛「…」

蔵人「…黒脛巾組を再び雇ってもらうのか？」

戸兵衛「…」

蔵人「…あのような下らぬ連中に？」

戸兵衛「言うな、蔵人」

蔵人「…戸兵衛…お前は意地と言ったな…何をそんなに意地になっている？ 甚

四郎を倒せば、我らの戦いも終わるのでは無いのか？」

戸兵衛「…俺は…忍の誇りを取り戻したいのだ」

蔵人「…誇り」

戸兵衛「…戦国の時代、我ら忍は無くてはならぬ存在だった。忍の働きで歴史

を動かすことさえあった…それが今はどうだ…俺は忍の…かつての栄光

を取り戻したい」

蔵人「…わからんではない…だが…」

戸兵衛「？」

蔵人「…平和な時代だからこそ、忍は必要なくなった…そう考えることもある」

戸兵衛「…蔵人」

蔵人「ふふ、安心しろ、小助の敵を取るまでは俺も忍だ」

戸兵衛「…」

蔵人「…行こう」

戸兵衛「…ああ」

二人がいなくなる。

黒脛巾組隠れ家。

曾良が縛り上げられている。

傍らにはふさがいる。

まきをがやって来る。

まきを「さてと…今日も始めようかしら」

曾良「…やめろ」

まきを「おやあ？ まだそんな生意気な口をきけるのかい？ 強いんだねえ、あ

んた…強い男は…好きだよ」

まきをがスケベな感じに曾良にまとわりつく。

曾良「ぐううううわあああああああああああああ！」

まきを「あらあら、まだそんな元気な声が出るのかい？ じゃあこれならどうだ

い？」

よりスケベな感じのアピール。

曾良「がああああああああああああああああああ！」

半六がやって来る。

半六「…これがみちのくの姐己と恐れられた女の拷問術か…凄まじい」

まきを「ちよっと、これが拷問しているように見える？」

半六「違うのか？」

まきを「誘惑してんの！」

半六「だが、誘惑してるにしては…」

まきを「コイツが変なのよ」

まきをがちよいとまとわりつく。

曾良「ぎゃあああああああ気持ちわるーーーーーい！」

一度離れ、またまとわりつく。

曾良「ぐわああああああ吐きそうだーーーーー！」

まきをはムカついて曾良の頭を良い音で一発ひっぱたく。

曾良「…痛い」

まきを「…なんなのコイツ」

半六「…色仕掛けは効果無いということなのでは？」

まきを「…芭蕉は衆道だって噂だから…ひよつとしてコイツも？」

半六「いや、甚四郎が衆道というのはありえない。奴には侍になってから婚約

者がいたのだ」

まきを「…じゃあ芭蕉が衆道だって噂は…」

半六「奴に恨みを持つ誰かが意図的に流したのだろう」

まきを「ふん」

まとわりついてみる。

曾良「わーーーーーたしーーーーーがーーーーながしまーーーーしたーーーー！」

まきをと半六には聞き取れなかった様子。

まきを「…コイツ…ムカつく！」

半六「ともかく、もう色仕掛けは…」

まきを「やめないよ。女より女らしい仕草をするなんて許せない。全ての女を

代表して私がコイツを籠絡してみせる」

半六「おいおい、コイツはあくまで甚四郎をおびき寄せさせるための餌だろう？ 餌で遊ぶな」

まきを「…おい、伊賀の半六：アンタと組んでいるのは共通の敵が芭蕉だからだ。余計な指図をするんじゃないよ」

半六「…」

まきを「…私の夫は伊賀との戦いで死んだんだ…芭蕉を討ち取ったら、あんたとはまた敵同士…それを忘れるんじゃないよ」

半六「…何をわかりきった…」

チラリと誘惑するまきを。

目を剥いて見てしまう半六。

まきを「…つたく…男って生きもんは…」

戸兵衛と蔵人が戻って来る。

蔵人「この者が…」

戸兵衛「ああ、伊賀の半六だ」

蔵人「…おい、伊賀の半六とやら…信用していいのであろうな」

半六「…信用に値する忍などいるのかね？」

蔵人「ふん、違いない」

戸兵衛「半六のおかげで重三郎の家を見つけることが出来たのだ」

半六「あれくらいの尾行、わけもない」

蔵人「甚四郎をつけて気づかれなかったということは、腕は確かなようだな」

半六「…黒脛巾組に褒められても嬉しくないな…それで？ 策はまとまったのか？」

戸兵衛「ああ、綱村様はこのように仰っていた…」

別空間に惟足と綱村が現れる。

綱村「…離間の計…でございますか？」

惟足「ええ、御存知ですか？」

綱村「…互いの仲を引き裂く計略」

惟足「その通りです」

綱村「…しかし、河合會良は既に捕えております…この状況における離間の計とは…」

惟足「…高尾太夫の身請けの日取りは？」

綱村「…三日後に」

惟足「刻限は？」

綱村「暮六つでございますが」

惟足「…では当日の七つ半頃、それを芭蕉と重三郎とやらにお伝えなさい」

綱村「…わざわざ連中を呼び込もうと仰るのですか？」

惟足「はい…それから…」

綱村「それから？」

惟足「河合會良の居場所も…」

綱村「なんと」

惟足「それからこうも伝えると良いでしょう、身請けの刻限と同時に河合會良の首を落とすと…」

綱村「…なるほど…なるほど！」

惟足「どうです？面白い趣向でしょう？」

綱村「はい」

惟足「それから…」

綱村「まだ仕掛けが？」

惟足は綱村に耳打ちする。

綱村「(笑) 惟足様、あなたは恐ろしいお方ですな」

惟足「お父上もこれで少しは大人しくなるやもしれませぬな」

綱村「はい」

笑いながらいなくなる二人。

場面は黒脛巾組隠れ家に戻る。

蔵人「…なるほどな」

まきを「どういうことですか？」

半六「高尾の身請けを知った芭蕉と重三郎は吉原へ向かおうとするだろう。だが、同時に弟子が殺されると知れば芭蕉はここへ向かおうとする」

戸兵衛「重三郎がどれほどの腕かはわからぬが、一人で吉原へ向かってでも勝ち目は無い、芭蕉の力が必要だ、だが芭蕉は弟子を見捨てるわけにはいかない」

蔵人「そこでまず仲違いが起きる」

まきを「どちらか片方を救ってからでは間に合わないのですか」

蔵人「ああ、高尾を救いに行った頃にはコイツ（曾良）は死んでいるし、コイツを先に救いに来たら身請けは済んでしまっているだろう」

まきを「では両方同時に救う方法を選ぶのではなくて？」

半六「芭蕉には二手に分けられるほどの戦力は無い」

戸兵衛「どのみち高尾のところには俺と蔵人、ここには半六とまきに居てもらう。それ以外にも伊達家の兵が周囲を幾重にも取り囲んでいるだろう」

まきを「…ということは」

戸兵衛「どちらを選ぼうと、芭蕉に待ち受けているのは…死」

沈黙。

蔵人「…この策を練った、吉川惟足と言う男…」

戸兵衛「…」

蔵人「…相当性格悪いな」

戸兵衛「…ああ」

曾良「…口も臭いですよ」

戸兵衛「…ああ、臭そうだ」

場面が切り替わる。

芭蕉庵。

芭蕉、重三郎、虚無僧がいる。

芭蕉「…丸二日か」

虚無僧「…曾良様…いつたい何処に…」

重三郎「…ふさ」

芭蕉「テメエは犬より高尾の心配しやがれ」

重三郎「…」

伊代が現れる。

口元に手をやり、遠くにいるはずの芭蕉との会話が始まる。

伊代「…甚四郎、聞こえる？」

芭蕉「…伊代か？」

重三郎「なにになになに？ どこから聞こえるの、この声？」

芭蕉「…忍の技の一つだよ、黙ってる。伊代、どうした？」

伊代「本当はもつと早く来れたら良かったんだけど、こっちも色々あってね…」

芭蕉「前置きはいいい」

伊代「…曾良は？」

芭蕉「…二日前から行方不明だ」

伊代「…やっぱり…黒脛巾組ね」

芭蕉「おそらくな」

伊代「…半六が一枚噛んでいるかもしれない」

芭蕉「半六？ なんでアイツが」

伊代「わからない。でも、アイツはあんたのことをあんまりよく思っていないみ

たいだったし」

芭蕉「アイツに忍の術を手ほどきしてやったのは俺なんだけどな」

伊代「あんたがその忍を捨てたからじゃないの」

芭蕉「そんな理由で黒脛巾組と組むかね」

伊代「…わからないけど…とにかくそれを伝えたくて」

芭蕉「わざわざありがとうよ」

伊代「…うん」

芭蕉「…伊代」

伊代「え？」

芭蕉「声に元気がねえな」

伊代「…ちよつと色々あってね」

芭蕉「何があった？」

伊代「…將軍様の身に何かあったらしいの」

芭蕉「…ほう」

伊代「…詳しいことは私なんかのところにはおりて来ないから…」

芭蕉「…そうか」

伊代「…うん」

芭蕉「…伊代」

伊代「…？」

芭蕉「…あんまり無理するなよ」

伊代「……ありがとう」

いつの間にかやって来た馬鹿吉が伊代を見ている。

馬鹿吉「…伊代様」

伊代「ちよつと、今、話し中なんだけど」

馬鹿吉「…中に入って話していけばいいじゃないですか」

伊代「私が抜け忍の甚四郎と会うわけにはいかないでしょうが」

芭蕉「聞こえてるぞ」

伊代「あ、ごめん、かけなおす。え？ かけなおすって何？」

馬鹿吉「知りませんよそんなこと」

伊代「馬鹿吉！ アンタも間の悪い時に現れるね」

馬鹿吉「間悪いも何も、ここに住んでますから、中は行って下さいよ」

伊代「それは出来ない！」

馬鹿吉「兄貴のこと好きなんでしょう？」

伊代「はあ？ 何言ってるの？ 今度そんなこと口走ったらあんた殺すわよ」

伊代がいなくなる。

馬鹿吉「…ははーん、わかって来たぞ、兄貴のことを好きな人がオイラを殺そうとするんだな」

場面が切り替わる。

黒脛巾組隠れ家。

曾良とふさが縛られた状態で放置されている。

曾良「…来る…来ない…来る…来ない……来る…来ない…来る…来ない……
来ない…来ない…来ない…来るわけがない」

想像の中の芭蕉が現れる。

芭蕉「え？もしお前が捕えられたら？」

曾良「はい」

芭蕉「(笑顔で)馬鹿だなあ、そんなの決まってるじゃねーか」

嬉しそうな顔を浮かべる曾良。

芭蕉「行かねーよ」

曾良「え？」

芭蕉「…だってお前…」

曾良「…はい」

芭蕉「ちんちんついてるじゃねーか」

曾良「え」

芭蕉「男たるもの、苦難は我が身一つで乗り越えるべきだ！」

曾良「…」

芭蕉「なにい？火事に喧嘩に博打に神輿だつて？馬鹿野郎！俺あ男だ！ま
とめてかかってきやがれ！」

高笑いをしていなくなる芭蕉。

曾良「…あの人が…男を助けに来るなんてことはありえない……は！恐るべし
吉川惟足…これも離間の計の一つか…」

惟足が現れ

惟足「もう一度、私の若衆にならんか？」

曾良「ならぬ！」

惟足は残念そうにいなくなる。

曾良「…あの男のことだ…私を生かしておいて手籠めにするくらいのはやりそうだ…」

曾良は外を見て

曾良「…もうじき夜が明ける…このまま暮六つまで待ってもきつと何も起きないだろう…芭蕉殿は来ない…私がただ傷つくだけだ……傷つきたくない」

俯く曾良。

曾良「…諦めるな…考えるんだ…傷つきたくないなら考えろ…何か方法があるはずだ」

寝ているふさが「く〜ん」と鳴きながら腰をかくかくさせる。

曾良「…そうか！ おい、ふさ！ ふさ！」

ふさが目を覚ます。

曾良「…おい、ふさ、かくかくしたくないか？」

ふさは「？」と首を傾げる。

曾良「かくかくだ、かくかく。こうだ」

曾良はかくかくのお手本を見せる。

ふさは「！」としてかくかくを始める。

曾良「そうだ！いいぞ！もっとかくかくしろ！」

ふさは更にかくかくする。

曾良「もつと！もつとだ！いいぞ！いいかくかくだ！」

等々、かくかく褒め続けてふさを煽る。

かくかくによつて縄が弛み、ふさが自由になる。

ハツとするふさ。

曾良「よし！」

ふさは嬉しそうに曾良の周囲を回る。

曾良「よしよしよし、よくやった、よくやったぞ、ふさ」

一度静止し、曾良にかくかくし始めるふさ。

曾良「こら、ふさ、私にかくかくしている場合ではない」

離れた所に置いてあつた鉄扇に光が当たる。

曾良「ふさ、あれを見ろ、あれをくわえて重三郎殿の元へ走るのだ」

ふさは鉄扇に近寄り「？」という具合に匂いを嗅ぐ。

ハツとしたふさは案の定、かくかくし始める。

曾良「ふさ！」

ふさはようやく鉄扇をくわえ走り去る。

曾良「…頼んだぞ、ふさ」

場面が切り替わる。

吉原、三浦屋。

戸兵衛と蔵人がいる。

正午を知らせる鐘の音が聞こえる。

蔵人「…九つか」

戸兵衛「…」

めかしこんだちとりが現れ、二人にあかんべえをして去る。

蔵人「…嫌われたもんだな」

戸兵衛「…ああ」

あでやかな着物を着た高尾が現れる。

頭には生花が飾られている。

高尾「…」

黙礼してから去る高尾。

綱宗が家臣を投げ飛ばしながら現れる。

綱宗「ぐあはははははは！ いよいよじゃ！ いよいよ今日、高尾がわしのものに！ ふぐあははははははは！」

家臣を投げ飛ばしなからいなくなる。

蔵人「…気の毒だな」

戸兵衛「…ん？」

蔵人「高尾のことよ、あのような下らぬ男の妾にならねばならんとは」

戸兵衛「…そうだな」

蔵人「…ん？」

戸兵衛「どうした？」

蔵人「…いや」

吉川惟足が現れる。

綱村が恭しく迎える。

蔵人「…何もんだ、あれは」

戸兵衛「…吉川…惟足…」

戸兵衛の声に殺気が混じる。

蔵人「ああ、寺社奉行神道方の」

蔵人が戸兵衛の異変に気がつく。

蔵人「おい、戸兵衛」

惟足と綱村が近づいて来る。

慌てて跪く二人。

綱村「戸兵衛、こちらが吉川惟足様だ」

惟足「おもてをあげよ」

顔を上げる二人。

惟足「ほほ、ほほほ、覚えておる、覚えておるぞ、そちもな」

戸兵衛「…申し訳ございません…何処かで…お会いしましたでしょうか…」

惟足「んふ、んふふふふ、覚えていないのも無理は無い…否、覚えているはずがない」

戸兵衛「…」

綱村「惟足様から貴様らに話しがあるそうだ」

戸兵衛「…？」

惟足「…ふむ、既に聞いていると思うが、この身請けの儀に松尾芭蕉が…伊賀の甚四郎がやって来る、奴は必ず来る」

戸兵衛「…は」

惟足「ふふ、貴様らにとっては憎くて憎くてたまらぬ相手であろう…存分に戦うが良い」

蔵人「…は」

惟足「…だが、話しというのはそのことではない」

蔵人「…？」

惟足「…どさくさに紛れて高尾太夫殺しておしまいなさい」

蔵人「な、なんと！」

惟足「ふふふふ」

戸兵衛「…理由は…」

惟足「貴様のような下賤の者が知る必要もないこと」

戸兵衛「……は」

綱村「…こういうのはなるべく派手な方が良い…そうさな、斬り捨てた上に逆さ吊りにするとか」

惟足「おお、それは良い」

綱村「…安心せい、黒脛巾組の仕業とはわからぬようにする。全て芭蕉の仕業として処理をするからまかせておけ」

惟足「ふふ、楽しみですな」

綱村「これで父上も大人しくなりましたよ」

惟足「…戸兵衛とやら」

戸兵衛「…は」

惟足「…十年前のように、負けてはならぬぞ」

綱村「惟足様」

惟足「おっと、これ口が滑った」

綱村「ふふ、戸兵衛、ぬかるなよ」

惟足、綱村がいなくなる。

蔵人「…高尾を斬れだど…ふざけたことをぬかしおって！」

戸兵衛「…」

蔵人「おい戸兵衛！このようなこと、引き受けてはならぬぞ」

戸兵衛「…」

蔵人「…戸兵衛？」

戸兵衛は無言で地面を殴る。

何度も何度も地面を殴りつける戸兵衛。

蔵人「…戸兵衛」

場面が切り替わる。

芭蕉庵。

芭蕉、重三郎、馬鹿吉、虚無僧がいる。

芭蕉が地面を殴りつける。

芭蕉「いいかげんにしやがれ！いつまでウジウジしてやがんでい！お前がそ
うやってウジウジしている間に高尾は身請けされちまうかもしれねーんだ
ぞ！」

重三郎「…でも…ふさが…ふさがいないと…私は…何も出来ない…」

芭蕉「犬がなんだってんだ！」

重三郎「…」

芭蕉「…わかったよ、じゃあもう高尾のことは諦めるんだな」

重三郎「…それは…嫌だ…高尾のことは…本当に…愛してるんだ」

芭蕉「…」

芭蕉は無言で立ち上がり重三郎の前に立つ。

重三郎「…？」

重三郎をぶん殴る芭蕉。

芭蕉「…愛してるって言いやがったな…愛を語りやがったな！」

重三郎「…」

芭蕉「…軽々しく愛なんて言葉を口にするんじゃないやねえ！愛ってのはなあ！愛
つてのは…命がけなんだ！命もかけてねえ奴が…愛なんて言葉を口にし
ちやいけねえんだ…」

重三郎「…」

座り込む芭蕉。

芭蕉「…俺にもかつて…惚れた人がいてな…」
貞「…」

馬鹿吉が貞に深編笠を脱げとジェスチャー。

首を振って拒否する貞、しまいには苦内を出す。

芭蕉「…俺は…その人のことが…貞様って言うんだけどな…」

身悶え始める貞。

芭蕉「…俺は…貞様のことを…愛していたよ…」

貞は「過去形？」という反応。

芭蕉「…でも…俺は貞様のことを傷つけてしまった…取り返しつかないことをしてしまったんだ…だから俺はもう…貞様を愛しているなんて言えねえ…俺にはその資格がねえ！」

貞は「そんなことない！」という反応。

芭蕉は立ち上がって重三郎の胸ぐらを掴み。

芭蕉「いいか重三郎…高尾のことを本当に愛しているなら…絶対に傷つけちゃいけねえ…愛っっーのはいつだって命がけだ…愛してるのなら命をかけて守りやがれ！」

貞はゴロゴロ転がって身悶えている。

重三郎「…」

重三郎は芭蕉から離れ、衣服を直し、座る。

ガラリと雰囲気が変わっている。

重三郎「…芭蕉殿」

芭蕉「…お、おう」

重三郎「…貴殿の言う通りでござる…お見苦しい姿をお見せした…大変失礼仕
った！」

土下座する。

芭蕉「おおお、おう」

重三郎「…芭蕉殿…貴殿に打ち明けねばならぬことがござる…実は拙者は…」

フラフラになったふさがやって来る。

重三郎「ふさ！」

重三郎がふさに駆け寄る。

重三郎「なにになになに？ どうしたのどうしたの？ ふらふらじゃん！ え？ な
に？ うそ？ 俺のこと探してくれてたのくれてたの？」

ふらふらながらも迷惑そうなふさ。

重三郎「何これ何これ何これ？ 扇子？ わ、おも！ おも〜！」

芭蕉「なに？」

馬鹿吉が曾良の鉄扇を手にする。

馬鹿吉「これは、曾良の兄貴の…」

芭蕉はふさをゆすり

芭蕉「おい、ふさ！ 曾良は何処だ！ 言え！」

重三郎「言わないよ、言わないでしょ、犬だから。ちよつと待って…」

重三郎が懐から餌を出してふさに食べさせる。

食べたふさは元気になって貞にかくかくする。

貞「いやゝ！ かくかくしないで！」

ふさが走り出す。

馬鹿吉「兄貴！ 先に行ってるから胞子を辿ってついてきて！」

馬鹿吉が走って追いかける。

重三郎「早っ！ 早くない？ あの俺より早っ！」

芭蕉「記憶を失っちゃいるが、ああ見えて元忍だからな。坊さん、留守を頼む！」

重三郎、行くぞ！」

重三郎「おお？ うえゝい！」

二人が走り出す。

黒脛巾組隠れ家。

曾良が縛られている。

曾良「…来る…来ない…来る…来ない…来る…来る…来る…来て…こっちに
来て…そして包容…からの接吻…来て…来て…来て！」

静寂。

曾良「…来る…来ない…来る…来た…」

ふさが現れかくかくする。

曾良「…お前か…そして…」

馬鹿吉がやって来る。

馬鹿吉「曾良の兄貴イ！」

曾良「…ふ…お前か…やはり芭蕉殿は…」

馬鹿吉「どうしたんです？ 助けに来たのに嬉しそうじゃありませんね」
曾良「…いや」

馬鹿吉が曾良の縄をほどく。

まきを「(OFF) …流石だねえ…離間の計とやらが全く役に立ってないじゃな
いか…」

まきをが現れ

まきを「…流石は伊賀の甚四郎…」

まきををは馬鹿吉を見て止まる。

馬鹿吉「？」

まきを「……………小助様！」

馬鹿吉「…え？」

馬鹿吉とまきをの背後で急激な回想。

芭蕉がござに包まれた人間を背負っている。

芭蕉「…重っ！」

「ござを人間ごと落とす。

上手い具合に顔は見えない。

芭蕉「…畜生、あんなふうには伊代に啖呵きってみたもの…どうしようかなこ

れ…もう死んでるかな」

曾良が現れる。

曾良「…あ、どうも」

芭蕉「…あ、どうも」

まだ他人行儀な二人。

二人でしゃがんで見下ろす。

曾良「あの、これ、死体ですか？」

芭蕉「いや、ぎり、生きてると思うんですけど」

「ござをめくって

曾良「…あゝこれ脳みそ出ちゃってるなあ」

芭蕉「ねーそうなんですよねー」

曾良「これは、あなたが？」

芭蕉「あ、いや、この人がー急に襲いかかって来てーそれでちよつとビックリしちゃってーこうふいつて避けたんですねーそれでーこの人物凄い足早いもんだからー勢いあまって止まらなくてーそれで頭からずっこけてー切り株でさくつとーやっちゃったみたいなんですねー」

曾良「あーなるほどですねー」

芭蕉「これ、どうしましょうかねー」

曾良「脳みそでちゃってますからねー…あ、こんなところに…」

曾良が毒キノコを拾う。

曾良「こんなものが」

芭蕉「あ、それ毒キノコですよ」

曾良「えー詳しいんですねー」

芭蕉「仕事柄、たまに使うんで、あ、まあ、ついさっきやめちゃったんですけど、仕事」

曾良「まあまあ、色々ありますからねー」

芭蕉「そうなんですよねー」

沈黙。

芭蕉「…とりあえず、そのキノコ、貼ってみます？」

曾良「そう…ですね、何もしないよりは」

芭蕉「あ、じゃあちよつと」

曾良「あ、はい」

芭蕉は曾良からキノコを受け取り、男の頭に貼る。

芭蕉「あれ？ なんだろこれ？」

曾良「え？」

芭蕉「なんか、丁度良くないですか？ これ」

曾良「ほんとだ、これ、丁度良いですね」

芭蕉「こんな丁度いいことあります？」

曾良「これは近年まれにみる丁度良さですよ」

男がビクリと動く。

芭蕉「あれ？ 動いた」

曾良「これ、キノコ効いたんじゃないですか？」

男「あっぱらびゅーんのぴーん！」

芭蕉「お、喋った」

男「ぼびゅーん！ ぺれぺれ！」

曾良「あゝでもだいたい馬鹿な感じですね」

芭蕉「ですねえ」

曾良「…これ、どうします？」

芭蕉「…とりあえず…まあ、連れて帰りますわ…縁なんで」

曾良「大変だと思えますよ、多分記憶とかも無くなっちゃってるだろうし」

芭蕉「あゝまあ、したら馬鹿吉とでも名付けますんで」

曾良「あゝそれいいかもわかりませんねゝ」

芭蕉「はい」

沈黙。

曾良「あ、じゃあまた、何か縁がありましたら」

芭蕉「あ、なんかすいません、引き止めちゃった感じで」

曾良「いえいえ、そんな、とんでもない…それじゃ」

芭蕉「それじゃ」

曾良はいなくなり、芭蕉はごぎの人間を背負っていなくなる

回想が終わる。

馬鹿吉「…まきを！」

まきを「小助様！」

抱き合う二人。

曾良「…どうということなのです？」

馬鹿吉「全部思い出したんだ、曾良の兄貴！ オイラ、黒脛巾組のもんなんだ！」

曾良「いや、それは知ってましたけど」

馬鹿吉「知ってたの！ オイラの本当の名前は小助って言って、こいつは俺の嫁

さんのまきをだ！」

まきを「小助様！ 生きてらっしゃったのですね！ 嗚呼！ 小助様！」

半六がやって来る。

抱き合っている姿を見て

半六「流石はみちのくの姐己と呼ばれた女、もう籠絡して（曾良を見て）え！ え

え！ どうやって…」

曾良「馬鹿吉、友人として忠告しておきますが、その女、なかなかのど淫乱で

すよ」

二人には聞こえてない。

馬鹿吉「まきを！」

まきを「小助様！」

重三郎がやって来る。

重三郎「え？ なになになに？ これはどういうこと？」

芭蕉がやって来る。

芭蕉「…俺が一番足が遅いって…」

ぜえぜえ言っている。

曾良「…芭蕉殿」

芭蕉「おお、曾良、無事だったか」

曾良「…助けに来て下さったのですか？」

芭蕉「おお、たりめーだろ、かわいい弟子が捕われているのに助けに来ない師匠がいるかい」

曾良「…かわいい？ かわいい弟子？ え？ かわいい？ 芭蕉殿がかわいいと言つて下さった？」

全力で喜びを噛みしめる曾良。

芭蕉「…よう半六」

半六「…甚四郎」

半六が構える。

芭蕉「…やるかい？」

芭蕉も構える。

半六「…ああ」

芭蕉「…むつりスケベは治ったのかい？ 半六」

半六「ほざけえ！」

二人の戦いが始まる。

芭蕉「…わかるぜ！ 随分腕をあげたなあ半六！」

半六「…貴様が抜けて…伊賀は…伊代様がどれだけ苦しんだことか！」

芭蕉「わかっちゃいねえなあ…俺はお前がいたから伊賀を抜けたってのに」
半六「戯れ言を！」

互いに一步も譲らない。

間合いを取る二人。

半六「…貴様を越えて…伊代様に認めて頂くのだ！」

芭蕉「…俺なんか越えなくなつて、伊代は充分お前を認めてるよ」

半六「…いくぞ」

芭蕉「…来な」

交叉する二人。

静寂。

半六「…やはり…十年…早かつたですね」

芭蕉「…いや…あと五年つてとこじゃねーか？」

半六「…ふふ…嫌な人だ」

半六が倒れる。

馬鹿吉「流石は芭蕉の兄貴！」

まきを「小助様、ではこのかたが…」

馬鹿吉「おう、俺の命の恩人でい！」

まきを「それはそれは…小助の妻のまきをでございます…主人を助けて頂いて、

本当にありがとうございます」

二人は抱き合つてる状態。

芭蕉「…全く状況が飲み込めねえ」

馬鹿吉「すまねえ兄貴、なんせ十年ぶりの再会なもんで片時も離れたくないん

でさあ」

芭蕉「…ああ、お前の嫁さんなのね…記憶戻つたんだ…良かった良かった（曾良に）おい聞いてねえぞ、馬鹿吉にまであんないい女がいたなんて」

曾良「大丈夫です、芭蕉殿にはもつといい女がいます」

芭蕉「？」

馬鹿吉「そうだ、まきを、蔵人の兄貴は元気にしてるのかい？」

まきを「あ、いけない！もうじき吉原で高尾太夫の身請けが…」

重三郎「ななな！なんだって！え？なんだって？」

重三郎が走り出す。

まきを「柳原様と兄上が待ち構えているはずですよ。小助様が生きてらっしゃった以上、もはや伊賀と黒脛巾が争う理由は…」

芭蕉「…そう上手くいくかどうかだが…いや、待てよ…馬鹿吉、ひとつ走りし

て伊代を呼んで来てくれ」

馬鹿吉「合点でさ！」

馬鹿吉が走り出す。

芭蕉「…行くぞ」

曾良「は！」

芭蕉、曾良、まきを、ふさが走り出す。

ふさが戻って来て半六の懐を探る。

半六の覆面をくわえる。

何を思ったか半六にストンピングするふさ。

半六「おえ！」

半六が気づく。

半六「貴様、それはわしの…」

ふさが駆け出す。

半六「待て！ 犬！」

場面が切り替わる。

三浦屋。

綱宗と高尾が並んで座っている。

高尾の傍らにはちとり。

綱宗側には綱村。

その他にも仙台藩士が数名。

戸兵衛と蔵人は末席に座っている。

惟足が現れ

惟足「…それでは…これより身請けの儀を執り行いたいと思います」

ふさが駆け込んで来る。

高尾「ふさ！」

綱宗「ん？」

蔵人「あの犬は…」

ふさは高尾を見つけて嬉しそうにかくかくする。

重三郎が駆け込んでくる。

重三郎「ちよつと待った！ いや、ちよつと待った！」

高尾「重三郎様！」

綱宗達を見て顔を隠す重三郎。

ふさは半六から奪った覆面を重三郎に渡す。

重三郎は覆面を被り

重三郎「高尾、待たせたな」

高尾「重三郎様！」

綱宗「貴様が重三郎か…斬れ！ 斬って捨てよ！」

仙台藩士達が立ち上がって刀を抜く。

芭蕉「待ちやがれ！」

芭蕉と曾良が駆け込んで来る。

惟足「ふふ、来たな」

蔵人「伊賀の甚四郎！」

綱宗「松尾芭蕉！」

芭蕉「あゝあゝ、揃いも揃って野暮だねえ…揚屋に刀を持ち込むとは…」

曾良「芭蕉殿も仕込み杖なのですから似た者同士なのでは？」

芭蕉「あ、お前、そういうこと言う？」

曾良「私は鉄扇ですから、私以外みんな野暮です」

芭蕉「ほー、そうきたかい」

綱宗「相変わらず余裕ぶちかましおって…切り捨てええい！」

仙台藩士達「おお！」

乱戦が始まる。

芭蕉、曾良、重三郎が背中あわせになり

芭蕉「重三郎、お前強えじゃねーか！」

重三郎「剣術は嫌いなんだけどね」

芭蕉「面白え！」

再び乱戦。

仙台藩士達を駆逐する。

綱村は静観していた戸兵衛と蔵人に向かって

綱村「何をしている！ やれ！」

戸兵衛と蔵人が前に出る。

芭蕉「…重三郎、高尾を」

重三郎「ああ」

重三郎は高尾の傍へ寄る。

芭蕉&曾良VS戸兵衛&蔵人の図になる。

戸兵衛と蔵人が抜刀する。

戸兵衛「…黒脛巾組、柳原戸兵衛」

蔵人「世瀬蔵人」

芭蕉「…？」

戸兵衛「参る！」

最後の戦いが始まる。

互いに一步も譲らない。

芭蕉と曾良、戸兵衛と蔵人、それぞれの連携。

互いに手傷を負いボロボロになっていく。

芭蕉「…あんだ…腕をあげたな」

戸兵衛「…貴様の腕がなまったのではないか、甚四郎」

芭蕉「…なあ、やめにしねえか？ 俺達が戦う理由がどこにある？」

戸兵衛「戦う理由か…それは俺が忍だからだ！」

戸兵衛の斬撃。

受ける芭蕉。

芭蕉「くだらねえ！ わかんねえのか！ 忍の時代は終わったんだ！」

戸兵衛「俺は貴様のように器用には生きられんのだ！」

間合いを取る二人。

戸兵衛「…俺は…忍の時代を取りもどす」

芭蕉「わからねえ野郎だな！ そんなこと出来るわけが…」

戸兵衛「…出来るか出来ないかはやってみなくちゃわからぬであろう！」

芭蕉「…」

互いにニヤリと笑う。

芭蕉「嫌いになれねえ野郎だな！」

再び打ち合いが始まる。

まきをが駆け込んで来る。

まきを「おやめ下さい！」

蔵人「まきを、なぜここに？」

まきを「この戦いに、もう意味はございませぬ！ 生きておられたのです！ 小

助様が生きておられたのです！」

蔵人「何を言っている！」

戦いは止まない。

まきを「兄上！」

馬鹿吉の声が聞こえる。

馬鹿吉「あゝにき〜！」

馬鹿吉がやって来る。

馬鹿吉「蔵人の兄貴！」

蔵人「小助！」

馬鹿吉「それから芭蕉の兄貴、曾良の兄貴、柳原様は柳原様」

蔵人「小助！ 貴様、本当に小助なのか！」

馬鹿吉「小助だよ！ 10年前のあの戦で怪我して記憶を失ったところを芭蕉の兄貴に助けてもらったんだよ！」

蔵人「なんと」

馬鹿吉「だからもう、戦う理由なんて無いんだよ」

一瞬の静寂。

伊代と半六がやって来る。

戸兵衛と蔵人、伊代と半六はそれぞれ反射的に構える。

伊代「…黒脛巾組」

蔵人「…小助…生きていて良かった…だがな…この戦いは終わらんのだ！」

馬鹿吉「なんでだよ蔵人兄貴！ もう戦う理由なんて…」

蔵人「あの戦では多くの仲間が死んだ！ そして…黒脛巾組は戦を仕掛けたと疑いをかけられ解散させられたのだ！」

伊代「なに都合のいいこと言ってるのさ！仲間を殺されたのはこっちだって一緒だ！あの戦のせいで伊賀は幕府内での地位を失ったんだ！」

睨み合いの静寂。

惟足「…んふ…んふふ…んふふふふふふ！」

芭蕉「？」

惟足「たまらん！これはたまらん！たまりませんあ綱村殿！十年前のあの戦の再来ですぞ！あの戦に参加していた者どもがこうして十年の時を経て再び争うておる！何も学ばず、何も気づかず、また同じことを繰り返しておる！愚かだ！なんと愚かなのだ！愉快、愉快じゃ！」

静寂の中、惟足の忍び笑いだけが響く。

芭蕉「…どうということだ？」

曾良「…あの戦は…あの男が仕組んだことなのです」

伊代「なんだって？」

惟足「こりゃ！曾良よ、種を明かすでない！むははははは！愚か！愚かじや！やはり忍などというものは、次の時代には無用のものなのじやう！」

戸兵衛「…やはり…そうであったか」

芭蕉「？」

戸兵衛が惟足の背後に周り刀を突きつける。

蔵人「戸兵衛！」

綱村「貴様！吉川様になんということを！」

戸兵衛「…ずっと…ずっと探していたのだ！あの戦を画策したのが誰なのか…陰で嘲笑っていたのが誰なのか！」

惟足「ほう、ただの馬鹿では無かったか」

戸兵衛「…その為に…今まで耐え忍んで来たのだ…ようやく見つけた…貴様が…全ての元凶…」

惟足「…その通りじゃ」

戸兵衛「…黒脛巾組も伊賀も関係無い…この刃は全ての忍の怒りだ…貴様には死んでもらう！」

刃を振り上げる戸兵衛。

妙な金属音が響き、戸兵衛の動きが止まる。

戸兵衛「…体が…」

惟足「…愚かな…わしが弱いとでも思ったのか」
曾良「いけない！」

惟足が隠していた短刀で戸兵衛を突き刺す。

戸兵衛「！」

蔵人「戸兵衛！」

馬鹿吉「柳原様！」

崩れ落ちる戸兵衛を芭蕉が支える。

蔵人「…貴様アアアア！」

蔵人、馬鹿吉が惟足に斬りかかる。

伊代「半六！ 行くよ！」

半六「は！」

伊代と半六も加勢する。

圧倒的な惟足の力に全く歯が立たない。

全員強烈な一撃をもらい跪く。

惟足「弱い！ 弱過ぎる！ 忍とはこれほどまでに弱きものなのか！」

伊代「…くそっ！」

惟足「…弱い者は滅びる…それが自然のことわりじゃ」

曾良が惟足に対峙する。

曾良「…虫め」

曾良と惟足の戦いが始まる。

善戦する曾良。

が、惟足は笑みを浮かべながら曾良の背後をとり耳元で囁く。

惟足「…わしが虫なら…その虫に抱かれていた貴様はなんじゃ？」

曾良は苦悶の表情を浮かべ

曾良「うあああああああああああああああ！」

曾良の連続攻撃。

惟足は笑みを浮かべながら躲す。

強烈な一撃をくらいへたり込む曾良。

惟足「…弟子が師を越えられるわけがなかるう」

なおも立ち上がるようにする曾良。

戸兵衛を看取った芭蕉が曾良の元に近寄る。

芭蕉「…あとはまかせな」

芭蕉が軽く構える。

芭蕉「…ふう」

一つ息を吐く芭蕉。

芭蕉「あああああああああああああああああああああああああああああああ！」

芭蕉の表情が悪鬼のように変わる。

芭蕉と惟足の戦い。

惟足の反撃を一切避けずに受ける芭蕉。

全く効いている様子が無い。

蔵人「…す、凄い…これが伊賀の甚四郎の力か…」

曾良「…違いますよ」

蔵人「…？」

曾良「これが…松尾芭蕉の力です」

追い込まれ、恐怖の表情を浮かべる惟足。

惟足「な、なんなんじゃコイツは！痛みも恐怖も感じないのか！」

芭蕉「…曾良…来たぜ」

曾良「…は！」

矢立てを取り出す曾良。

ドドン。

芭蕉「やがて死ぬけしきは見えず蝉の声」

芭蕉の連続攻撃。

惟足が吹っ飛ぶ。

惟足「…あ…あ…あ…あ…」

惟足に切っ先を突きつける芭蕉。

曾良「…芭蕉殿」

芭蕉は惟足を見下ろし

芭蕉「…てめえなんか…殺してやんねえよ」

拳の一撃で惟足を失神させる。

芭蕉「…」

重三郎は綱宗と綱村にしか見えない角度で覆面を外す。

驚愕する綱宗、綱村。

重三郎「…行け」

一礼して去っていく綱宗と綱村。

仙台藩士達が惟足を担いで連れて行く。

戸兵衛の遺体の周りに集まる面々。

芭蕉が跪き、戸兵衛の様子を見る。

首を振る芭蕉。

まきをが声を上げて泣く。

伊代「…忍の中の…忍であった…」

芭蕉が戸兵衛の臉を閉じる。

高尾が髪に指していた花を手向ける。

馬鹿吉が頭のキノコを手向ける。

戸兵衛「あっぱらぴゅーんのぴーん！」

蘇る戸兵衛。

全員「…わあ」

全員がゆるく驚いた所で、暗転。

江戸城。

芭蕉と曾良が跪いている。

少し離れたところに伊代。

伊代は口元に手をやりながら

芭蕉「へー、それからどうなったんだい？」

伊代「吉川惟足はお咎めなしだそうよ」

芭蕉「あ？ なんでだよ、あんな悪人めったにいねえぞ」

伊代「彼の背後には朝廷がついてるから下手なことは出来ないの…それでも、今回のことではばらくおとなしくはしているでしょうね」

芭蕉「ふーん、伊達は？」

伊代「綱宗公は隠居させられて綱村公が後を継ぐことになったわ」

曾良「お取り潰しというわけにはいきませんでしたか」

伊代「60万石の大大名だからね。そんなことしたら戦になってしまいうんできょう」

芭蕉「綱宗の隠居で手打ちってわけだ」

伊代「ええ」

芭蕉「しかしまあ、ひでえ噂をまかれたもんだな綱宗も」

曾良「高尾太夫を逆さ吊りにして殺した」

伊代「隠居の理由にはもってこいでしょう？」

芭蕉「あれはお前らが撒いた噂だろう？」

伊代「戸兵衛達にも手伝ってもらってね」

芭蕉「伊賀と黒脛巾組に組まれて噂まかれたんじやかなわねえな」

伊代「これからは伊賀だの黒脛巾組だのは言ってられない。忍そのものが滅びてしまう前に、各地の忍と連携をとっていくつもりよ」

芭蕉「それが、伊賀の意志かい？」

伊代「いいえ、綱吉様の意志よ。滅びゆく忍を集めて新しい組織を作る。御庭番と呼ぶそうよ」

芭蕉「へ〜」

伊代「まあ、それにはもう少し時間がかかるでしょうけど」

芭蕉「…時間がかかると言えばだ…俺達はいつまで待たされるんだい？」

伊代「それは…」

芭蕉「江戸城くんだりまで呼び出されて、あげくにこんなに待たされて、いったいどのどいつが…」

ふさが走って来る。

芭蕉「あれ？ ふさ、なんでお前がこんなところに」

ふさは曾良にかくかくする。

曾良「…やっぱりね」

高尾がやって来る。

高尾「これ、ふさ、おやめなさい」

芭蕉「高尾！ なんでおめーさんがこんな所に？ 重三郎と一緒にだったんじやなかったのい？」

高尾「ええ、実は…私も知らなかったのですが…」

伊代「…綱吉様がいらっしゃったわ」

慌てて頭を下げる芭蕉。

綱吉（島田重三郎）が現れる。

綱吉「…表をあげい…いや、表をあげい！」

芭蕉「あ？」

顔を上げて驚愕する芭蕉。

芭蕉「てめえ！重三郎！」

綱吉「や、芭蕉殿」

芭蕉「なんでオメーがこんなところに」

伊代「…こちらが、綱吉様よ」

沈黙。

ふさは綱吉を小馬鹿にしたような行動。

芭蕉「…………だとコラア！」

綱吉「ごめんね、あ、あと、ごめんね、ちゃんと名乗らなくてさ、あ、名乗れなかつただけどね、だつてさあ、將軍なんだもん」

芭蕉「なんだもんじゃねーぞこの野郎」

綱吉「ほんと、その節はお世話になったね、ありがとうね、あ、あと、ありがとうね、おかげで高尾とも一緒になれたし」

伊代「綱吉様、これからはお一人での外出はおひかえ下さい。大変だったんですよ、將軍が行方不明になったって大騒ぎで」

綱吉「ごめん」

伊代「今度逃げたら小助に追わせますからね」

綱吉「馬鹿吉かあ、アイツ俺より足早いもんなあ、うん、わかったよ、もうしない」

芭蕉「おいコラ」

綱吉「あ、それでね、芭蕉殿、一つお願いごとがあるんだけど」

芭蕉「厄介ごとの間違いじゃないのかい？」

高尾「ふふふ」

綱吉「…知つての通り、幕府は一枚岩ではなく、その内情はとても複雑で、それぞれと思惑が絡み合いながら、ようやく釣り合いを保っている状態なんだ」

芭蕉「(そつぽを向きながら) ああ」

綱吉「…この釣り合いが崩れると、すぐにもまた戦国の世に逆戻りしてしまう」

芭蕉「…」

綱吉「…俺は嫌なんだ…死っていうものが…動物の死だって耐えられないのに大切な人の死なんて…世間じゃ評判悪いけどさ、生類憐みの令だって、命を大切にしようよってことを言いたいだけなんだ」

芭蕉「…」

綱吉「…そこでね、芭蕉殿にお願いしたいのは…全国各地を旅して回って来て欲しいんだ」

芭蕉「…旅？」

綱吉「伊達だけじゃなくてね、全国には幕府に反感を持っている大名がたくさんいるんだ」

曾良「…それは…密偵をしろということですか？」

綱吉「うん、まあ、それだけじゃないけどね、各地の忍と出会って御庭番への勧誘もして欲しいし、何よりも…」

曾良「何よりも？」

綱吉「…様々なものを見て、様々な人と出会い、そしてそれを俳句として残して欲しい」

間。

芭蕉は笑顔を浮かべ立ち上がる。

芭蕉「…いいね…粋じゃねえか…重三郎、乗ったぜ」

場面が切り替わる。

【エピローグ】

芭蕉庵。

貞が嬉しそうに甲斐甲斐しく部屋を掃除したり、旅の荷物を整えたり。

芭蕉と曾良がやって来る。

貞は嬉しそうに深編笠を被る。

芭蕉「それじゃ坊さん、申しわけねえが留守を頼んだぜ」

貞「はい！…留守を頼まれるなんて…まるで妻になったよう…嗚呼！」

曾良は矢立てを取り出し

曾良「まずは、何処から目指しますか？」

芭蕉「…伊達の動向も気になるし、みちのくからかなあ」

曾良「題名はいかがいたしますか？」

芭蕉「…ふしむ、みちのく、みちの奥…奥の細道でいいんじゃねえか？」

曾良「なるほど、奥の細道ですか」

芭蕉「おう」

芭蕉は目をつむり

芭蕉「…月日は百代の過客にして…行かふ年も又旅人也…」

芭蕉は思い切ったように貞の肩を掴み見つめる。

芭蕉「…草の戸も住替る代ぞひなの家」

膝から崩れ落ちる貞。

芭蕉「…行くぜ、曾良」
曾良「は！」

芭蕉と曾良は駆けて行く。

貞は深編笠を外す。

その目は涙で濡れているが、何処か嬉しそうである。

幕